



インストール・ガイド



インストール・ガイド

ご注意

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、85ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Rational Functional Tester (部品番号 5724-G25) バージョン 7.0.1.2、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

IBM 発行のマニュアルに関する情報のページ

<http://www.ibm.com/jp/manuals/>

こちらから、日本語版および英語版のオンライン・ライブラリーをご利用いただけます。また、マニュアルに関するご意見やご感想を、上記ページよりお送りください。今後の参考にさせていただきます。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典：	GI11-6751-03 IBM Rational Functional Tester, Version 7.0 Installation Guide
発行：	日本アイ・ビー・エム株式会社
担当：	ナショナル・ランゲージ・サポート

目次

概説	1	Windows での Installation Manager のアンインストール	28
IBM Installation Manager	1	Linux での Installation Manager のアンインストール	29
IBM Rational Software Delivery Platform	1	Installation Manager のサイレント・インストールとアンインストール	29
インストール要件	5	Installation Manager のサイレント・インストール	29
ハードウェア要件	5	Windows からの Installation Manager のサイレント・アンインストール	29
ソフトウェア要件	6	他のプラットフォームでの Installation Manager のサイレント・アンインストール	30
ユーザー特権についての要件	8	電子イメージの確認および解凍	31
インストール計画	11	ダウンロードしたファイルの解凍	31
インストール・シナリオ	11	ランチパッド・プログラムからのインストール	33
インストールするフィーチャーの決定	12	ランチパッド・プログラムの開始	33
フィーチャー	13	ランチパッド・プログラムからのインストールの開始	34
アップグレード、および共存についての考慮事項	14	Installation Manager GUI を使用した Rational Functional Tester のインストール	35
IBM Rational Functional Tester バージョン 6.1.x からのアップグレード	14	Test Agent での作業	39
IBM Rational Functional Tester の以前のバージョンからのテスト資産のマイグレーション	14	Windows への Rational Test Agent のインストール	39
IBM Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 1.x のバージョン 7.0.1 へのアップグレード	14	Windows での Rational Test Agent の開始	40
製品の共存についての考慮事項	15	Linux への Rational Test Agent のインストール	40
インストール・リポジトリ	15	Linux での Rational Test Agent および RAServer の開始	41
Installation Manager のリポジトリ設定	16	Test Agent での環境の使用可能化	41
パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリ	17	Test Agent でのアプリケーションの構成	42
既存の Eclipse IDE の拡張	18	サイレント・インストール	45
プリインストール・タスク	19	Installation Manager を使用した応答ファイルの作成	45
インストール作業	21	Installation Manager インストーラーを使用した応答ファイルの記録	46
Rational Functional Tester の CD-ROM からのインストール: 作業の概要	21	サイレント・モードでの Installation Manager のインストールと実行	47
ワークステーション上の電子イメージからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要	22	すべての使用可能な製品の検索とサイレント・インストール	49
電子イメージからのインストール	22	現在インストールされているすべての製品に対する更新のサイレント・インストール	49
共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要	23	応答ファイルのコマンド	49
HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要	23	サイレント・インストール設定コマンド	50
HTTP Web サーバー上へ Rational Functional Tester を配置: タスクの概要	24	サイレント・インストール・コマンド	52
IBM Installation Manager の管理	27	参照: サンプル応答ファイル	57
Windows への Installation Manager のインストール	27	サイレント・インストール・ログ・ファイル	57
Linux への Installation Manager のインストール	27	ライセンスの管理	59
Windows での Installation Manager の開始	28		
Linux での Installation Manager の開始	28		

ライセンス	59
ライセンスの使用可能化	60
インストール済みパッケージのライセンス情報の表示	61
プロダクト・アクティベーション・キットのインポート	61
フローティング・ライセンスの使用可能化	62
ライセンスの購入	63
Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす	65
Rational Functional Tester の開始	67
Rational Functional Tester の更新	69
インストールの変更	71
前のバージョンへの更新の復帰	73
Rational Functional Tester のアンインストール	75

IBM Packaging Utility	77
Packaging Utility のインストール	77
Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー	78
オプション・ソフトウェアのインストール	81
Manual Tester の Functional Tester によるインストール	81
ClearCase LT のインストール	81
ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報の探索	82
Rational ClearCase LT のインストールの開始	83
Rational ClearCase LT ライセンスの構成	83
特記事項	85
商標	86

概説

このインストール・ガイドには、IBM® Rational® Functional Tester のインストール、更新、およびアンインストール方法が記載されています。

この「インストール・ガイド」の最新版は、http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rft/70/docs/install_instruction/install.html でオンラインで入手可能です。

注: 文書の更新内容やトラブルシューティングの情報については、<http://www.ibm.com/software/rational/support/documentation/> を参照してください。

IBM Installation Manager

IBM Installation Manager は、コンピューターに Rational Functional Tester 製品パッケージをインストールするプログラムです。インストールしたパッケージの更新、変更、およびアンインストールを行う上でも役立ちます。パッケージとは、Installation Manager でインストールされるよう特別に設計された製品、複数コンポーネントのグループ、または単一のコンポーネントです。

IBM Installation Manager には時間を節約できるフィーチャーが複数提供されており、これらのフィーチャーを使用して以下のタスクを完了することができます。

- 製品パッケージのインストール
- インストールした製品パッケージのライセンスの管理
- インストールした製品パッケージに対する更新の検索とインストール
- インストールした製品パッケージの変更
- インストールした製品パッケージの旧バージョンへの復帰
- 製品パッケージのアンインストール

IBM Installation Manager の詳細については、<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1m0r0/index.jsp> の、Installation Manager のインフォメーション・センターを参照してください。

IBM Rational Software Delivery Platform

IBM Rational Software Delivery Platform は、複数の製品を共用する開発ワークベンチとその他のソフトウェア・コンポーネントを含む共通開発環境です。

デリバリー・プラットフォームには、以下が含まれています。

- Rational Application Developer
- Rational Functional Tester
- Rational Performance Tester
- Rational Software Architect
- Rational Software Modeler

- Rational Systems Developer
- Rational Tester for SOA Quality

Rational Manual Tester も使用可能ですが、このプラットフォームの一部ではありません。Manual Tester は、Rational Functional Tester と一緒に組み込まれていますが、別途購入することも可能です。

Rational Functional Tester について

IBM Rational Functional Tester は、オブジェクト指向の自動化テスト・ツールであり、Windows®、.Net、Java™、HTML、Siebel、および SAP アプリケーションのテストを行います。Rational Functional Tester を使用すると、テスト・アプリケーションの新規ビルドの検証に再生可能な、信頼性の高い、堅固なスクリプトを記録することが可能になります。Functional Tester は、Windows 2000、Windows XP、および Linux® の各プラットフォームで稼働します。

Functional Tester は、2 つの統合開発環境と 2 つのスクリプト言語で使用可能です。Functional Tester Java Scripting では、Java 言語と IBM Rational Software Delivery Platform が使用されます。Functional Tester VB.NET 2003 および VB.Net 2005 Scripting では、VB.NET 言語と Microsoft® Visual Studio .NET 開発環境が使用されます。

Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications について

Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications は、ホスト・アプリケーション・テスト・ケースを自動化するテスト・スクリプトの作成を支援するツールです。Functional Tester Extension for Terminal-based Application は、ホスト属性、ホスト・フィールド属性、およびホスト・アプリケーションのスクリーン・フローをテストするための豊富な機能セットを提供します。また、端末検査ポイントとプロパティを使用し、同期コードを使用して、ユーザー入力に対する端末の作動可能性を判別します。

Functional Tester Extension for Terminal-based Applications を使用すると、次のことができます。

- プロパティ・ファイルを使用して、共通のホスト構成を保管、ロード、および共有する。接続構成は、これらのファイルを使用して、スクリプトで自動的にロードできます。
- 複数のホスト端末に対してスクリプトを記録または再生する。
- スクリプトを記録または再生していないときでも、端末を起動する。この機能を使用すると、実行中の Eclipse または .NET 環境を終了することなく、ホストと対話できます。

Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications を使用するには、個別のライセンスを購入する必要があります。

(Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 以降のみ) IBM Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 は、IBM Rational Functional Tester バージョン 7.0.1 フル CD イメージを使用する場合に限り入手できます。

コンピューターに Functional Tester バージョン 7.x が既存の場合は、バージョン 7.0.1 にアップグレードしてください。その後、Rational Functional Tester バージョン 7.0.1 フル CD イメージを使用して、Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 をインストールしてください。Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、ライセンスをアクティブ化してください。

初めて Functional Tester 7.0.1 をインストールする場合は、Functional Tester 7.0.1 のインストール中に Functional Tester Extension for Terminal-based Applications をインストールできます。

インストール要件

このセクションでは、ソフトウェアを正常にインストールし、実行するために満たす必要がある、ハードウェア、ソフトウェア、およびユーザー特権の要件について説明します。

最新のシステム要件については、 www.ibm.com/software/awdtools/tester/functional/sysreq/index.html を参照してください。

ハードウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムが最小ハードウェア要件を満たしていることを確認してください。

ハードウェア	要件
プロセッサ	最小: 1.5 GHz Intel® Pentium® 4 (最適な結果を得るためにはそれ以上)
メモリー	最小: 1 GB の RAM
ディスク・スペース	製品パッケージのインストール用として、最小: 750 MB のディスク・スペースが必要です。開発するリソース用に追加ディスク・スペースが必要です。 注: <ul style="list-style-type: none">ディスク・スペース要件は、インストールするフィーチャーによって増減する場合があります。この製品をインストールするための製品パッケージをダウンロードする場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。Windows の場合: NTFS の代わりに FAT32 を使用する場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。Windows の場合: ご使用の環境変数 TEMP でポイントされるディレクトリーに、追加で 500 MB のディスク・スペースが必要となります。Linux の場合: 追加で 500 MB のディスク・スペースが /tmp ディレクトリーに必要となります。Rational Functional Tester Extension for Terminal Based Applications の場合: 追加で 120 MB のディスク・スペースが必要です。
ディスプレイ	最低でも 256 色を使用する 1024 x 768 の解像度 (最適な結果を得るためにはそれ以上)

ハードウェア	要件
その他のハードウェア	Microsoft マウスまたは互換のポインティング・デバイス

ソフトウェア要件

製品をインストールする前に、ご使用のシステムがソフトウェア要件を満たしていることを確認してください。

オペレーティング・システム

32 ビット・モードでは、次のオペレーティング・システムが、この製品でサポートされています。

- Microsoft Windows XP Professional (Service Pack 2)
- Microsoft Windows 2000 Professional (Service Pack 4)
- Microsoft Windows 2000 Server (Service Pack 4)
- Microsoft Windows 2000 Advanced Server (Service Pack 4)
- Microsoft Windows 2003 Server Standard Edition (Service Pack 1 または 2)
- Microsoft Windows 2003 Server Enterprise Edition (Service Pack 1 または 2)
- Microsoft Windows Vista Business、Windows Vista Enterprise、および Windows Vista Ultimate
- Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 4.0 (記録を除くすべての機能)
- Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 4.0 更新 5 (記録を除くすべての機能)
- Red Hat Enterprise Linux Desktop バージョン 4.0 (32 ビット・モード、記録を除くすべての機能)
- SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 9.0 (32 ビット・モード、記録を除くすべての機能)
- SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 10.0 (Service Pack 1) (記録を除くすべての機能)
- SUSE Linux Enterprise Desktop バージョン 10.0 (Service Pack 1) (32 ビット・モード、記録を除くすべての機能)

リストされているオペレーティング・システムでは、Rational Functional Tester でサポートされるすべての言語がサポートされます。

注: Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications は、Microsoft Windows 2000、Microsoft Windows XP、Microsoft Windows Server 2003、および Microsoft Windows Vista システムで実行されます。zSeries® (MVS™ および VM の場合は TN3270 端末タイプ)、iSeries® (OS/400® の場合は TN5250 端末タイプ) および pSeries® (UNIX の場合は VT 端末タイプ) ホストへの接続がサポートされます。

既存の Eclipse IDE を拡張するためのソフトウェア要件

このバージョンの IBM Rational Software Delivery Platform の製品は、Eclipse IDE バージョン 3.2.2 以降での使用を前提に、開発されました。既存の Eclipse IDE の拡張は、eclipse.org から提供される最新の更新が適用されたバージョン 3.2.2 でのみ可能です。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、以下のいずれかの Java 開発キットの JRE も必要です。

- Windows の場合: IBM 32-bit SDK for Windows、Java 2 Technology Edition、バージョン 5.0 サービス・リリース 5、Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 12 for Microsoft Windows。
- Linux の場合: IBM 32-bit SDK for Linux (Intel アーキテクチャー上)、Java 2 Technology Edition、バージョン 5.0 サービス・リリース 5、Sun Java 2 Standard Edition 5.0 Update 12 for Linux x86 (SUSE Linux Enterprise Server [SLES] バージョン 9 は非サポート)

注:

- Sun Java 2 Standard Edition (Java SE) Runtime Environment (JRE) 6.0 はサポートされません。
- 更新を Rational Functional Tester にインストールするには、Eclipse バージョンの更新が必要な場合があります。前提となる Eclipse バージョンへの変更については、更新情報のリリース文書を参照してください。

重要: 管理者特権を持たないユーザーが Rational Functional Tester を Windows Vista システム上で操作するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files¥) 内に Eclipse をインストールしないでください。

サポートされる仮想化ソフトウェア

次の仮想化ソフトウェアがサポートされます。

- Citrix Presentation Manager バージョン 4、Windows Server 2003 Standard Edition または Windows Server 2003 Professional Edition 上で稼働

追加のソフトウェア要件

- Microsoft Visual Studio.Net 2003 および .NET 2003 スクリプト用の .Net Framework 1.1
- Microsoft Visual Studio.Net 2005 および .Net 2005 スクリプト用の .Net Framework 2.0
- Linux の場合: GNU Image Manipulation Program Toolkit (GTK+) バージョン 2.2.1 以降および関連ライブラリー (GLib、Pango)。
- 以下の Web ブラウザーのいずれか (README ファイルと「インストール・ガイド」を表示し、Standard Widget Toolkit (SWT) ブラウザー・ウィジェットをサポートするために必要です)
 - Windows の場合: Microsoft Internet Explorer 6.0 (Service Pack 1) 以降
 - Mozilla 1.6 以降
 - Firefox 1.0.x、1.5、2.0 以降

注:

- Red Hat Enterprise Linux Workstation バージョン 4.0 では、環境変数 MOZILLA_FIVE_HOME を、Firefox または Mozilla インストールが入っているフォルダーに設定する必要があります。例えば、setenv MOZILLA_FIVE_HOME /usr/lib/firefox-1.5 です。
- SWT ブラウザー・ウィジェットをサポートするには、Firefox ブラウザーをリンク可能な Gecko ライブラリーとコンパイルしておく必要があります。現時点では、mozilla.org からダウンロードする Firefox はこの基準を満たしていませんが、主要な Linux ディストリビューションに組み込まれている Firefox のインストールでは一般にサポートされています。

注: ランチパッドでは Mozilla 1.6 がサポートされていません。ご使用のブラウザーが Mozilla の場合にランチパッドを実行するには、バージョン 1.7 以降が必要です。

- ツアー、チュートリアル、およびデモンストレーション・ビューレットなどのマルチメディア・ユーザー支援を正しく表示するには、Adobe® Flash Player をインストールする必要があります。
 - Windows の場合: バージョン 6.0 リリース 65 以降
 - Linux の場合: バージョン 6.0 リリース 69 以降

注: Functional Tester Extension for Terminal-based Application によって、システムに IBM Host On-Demand の IBM SWT HA Beans フィーチャーがインストールされます。IBM Host On-Demand の最新バージョンをシステムで使用できる場合、Extension for Terminal-based Application は、既にインストールされている IBM SWT HA Beans フィーチャーを使用します。Extension for Terminal-based Application には IBM Host On-Demand が必要なため、これをアンインストールしないでください。

ユーザー特権についての要件

Rational Functional Tester をインストールするには、以下の要件を満たすユーザー ID が必要です。

- ユーザー ID には 2 バイト文字が含まれてはいけません。
- Windows の場合: インストール時に必要となるユーザー特権は、ご使用のコンピューターの Windows バージョンによって決まります。
 - **Windows Vista** の場合、管理者アカウントでログインして、次のタスクを実行します (あるいは、プログラム・ファイルまたはショートカットを右クリックし、「管理者として実行」を選択して、管理者として実行してください)。
 - IBM Installation Manager をインストールまたは更新します。
 - 製品オファリングをインストールまたは更新します。
 - IBM Installation Manager を使用して、ご使用の製品の許可ユーザー・ライセンス・キーをインストールします。

注: 管理者ではないユーザーが Windows Vista システム上で Rational Functional Tester を操作するには、以下の点に注意してください。

- Rational Functional Tester を、Program Files ディレクトリー (C:¥Program Files¥) のパッケージ・グループ (インストール・ロケーション) にインストールしないでください。また、Program Files ディレクトリーの共用リソース・ディレクトリーを選択しないでください。
 - 既存の Eclipse インストールを拡張している場合、Program Files ディレクトリー (C:¥Program Files¥) に Eclipse をインストールしないでください。
- サポート対象である、その他の **Windows** バージョンの場合、管理者グループに属するユーザー ID を使用する必要があります。
- Linux の場合: root としてログインできる必要があります。

インストール計画

どの製品フィーチャーをインストールしたり更新したりする場合にも、事前にこのセクションのすべてのトピックをご一読ください。効果的なプランニングと、インストール・プロセスの主要な段階を理解することが、インストールの成功につながります。

インストール・シナリオ

Rational Functional Tester をインストールする際や更新する際に使用できるシナリオは多数あります。

(Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 以降のみ) これらのシナリオは、Functional Tester Extension for Terminal-based Applications をインストールする場合にも適用できます。

以下に、インストール・シナリオを決定するであろう要素をいくつか挙げます。

- インストール・ファイルにアクセスするとき使用する形式および方式 (例えば、CD にアクセスする、IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードしたファイルにアクセスするなど)。
- インストールのロケーション (例えば、ご使用のワークステーション上に製品をインストールしたり、インストール・ファイルをお客様の社内で使用できるようにしたりすることができます)。
- インストールのタイプ (例えば、Installation Manager の GUI を使用したり、サイレント・インストールを行うことができます)。

典型的なインストール・シナリオには、以下のものがあります。

- CD からのインストール。
- ワークステーションにダウンロードした電子イメージからのインストール。
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール。
- HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール。

後の 3 つのシナリオでは、サイレント・モードで Installation Manager プログラムを実行して、Rational Functional Tester をインストールするように選択できます。Installation Manager のサイレント・モードでの実行の詳細については、45 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

基本製品パッケージのインストールと同時に、更新もインストールできることにも注意してください。

CD からのインストール

このインストール・シナリオでは、お客様は製品パッケージのファイルが含まれている CD を持っており、通常は、ご自身のワークステーション上に Rational Functional Tester をインストールします。このステップの概要については、21 ページの

ジの『Rational Functional Tester の CD-ROM からのインストール: 作業の概要』を参照してください。

ワークステーションにダウンロードした電子イメージからのインストール

このシナリオでは、お客様は IBM パスポート・アドバンテージからインストール・ファイルをダウンロードしており、ご自身のワークステーション上に Rational Functional Tester をインストールします。このステップの概要については、22 ページの『ワークステーション上の電子イメージからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要』を参照してください。

共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

このシナリオでは、お客様は共用ドライブ上に電子イメージを置いて、社内のユーザーが 1 つのロケーションから Rational Functional Tester のインストール・ファイルにアクセスできるようにします。このステップの概要については、23 ページの『共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要』を参照してください。

HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール

このシナリオは、ネットワークを通じて製品をインストールする最速の方式で、共用ドライブからのインストールとは異なります。HTTP または HTTPS Web サーバー上に Rational Functional Tester の製品パッケージ・ファイルを置くには、ユーティリティー・アプリケーションの 1 つである IBM Packaging Utility を使用して、Rational Functional Tester の HTTP または HTTPS Web サーバーからの直接インストールに使用できるパッケージ形式でインストール・ファイルをコピーしなければなりません。このユーティリティーは、Rational Functional Tester に付属しています。パッケージが含まれている HTTP または HTTPS Web サーバー上のディレクトリは、リポジトリと呼ばれます。Rational Functional Tester インストール CD に同梱されているオプション・ソフトウェアはこのパッケージに入っていないことに注意してください。このパッケージに入っているのは Rational Functional Tester インストール・ファイルのみです。このステップの概要については、23 ページの『HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要』および 24 ページの『HTTP Web サーバー上へ Rational Functional Tester を配置: タスクの概要』を参照してください。

インストールするフィーチャーの決定

インストールする Rational Functional Tester のフィーチャーを選択することにより、ソフトウェア製品をカスタマイズできます。

IBM Installation Manager を使用して Rational Functional Tester の製品パッケージをインストールする場合は、使用可能な製品パッケージに入っているフィーチャーがインストール・ウィザードに表示されます。このフィーチャー・リストから、インストールするフィーチャーを選択できます。デフォルトの一連のフィーチャーが選

択されています (必須フィーチャーはすべて含まれています)。フィーチャー間に依存関係があれば、Installation Manager はそれを強調し、必要なフィーチャーが消去されないようにします。

注: パッケージのインストールを終了した後も、Installation Manager で「パッケージの変更」ウィザードを実行して、ソフトウェア製品のフィーチャーを追加または除去することができます。詳しくは、71 ページの『インストールの変更』を参照してください。

フィーチャー

以下の表には、インストールを選択できる Rational Functional Tester のフィーチャーが示されています。デフォルトでインストール対象として選択済みのフィーチャーは、異なる場合があります。フィーチャーがすでに共用リソース・ディレクトリに存在している場合は、デフォルトでは選択されず、再度インストールされることはありません。

フィーチャー	説明	インストール対象としてデフォルトで選択済み
Java スクリプト	Eclipse IDE を使用した、Java、Web、Siebel、および SAP アプリケーションの自動化された機能と回帰のテストを提供します。Siebel および SAP アプリケーションのテストには、.Net Framework 1.1 または 2.0 が必要です。	はい
.Net 2003 スクリプト	.Net 2003 IDE を使用した、VB.NET、Java、Web、Siebel、および SAP アプリケーションの自動化された機能と回帰のテストを提供します。.Net Framework 1.1 が必要です。	いいえ
.Net 2005 スクリプト	.Net 2005 IDE を使用した、VB.NET、Java、Web、Siebel、および SAP アプリケーションの自動化された機能と回帰のテストを提供します。.Net Framework 2.0 が必要です。	いいえ
エージェント	テスト・スクリプトをリモートで実行するための Rational Functional Tester コア・ランタイム・コンポーネントと ClearQuest® Test Manager Agent コンポーネントが含まれています。このフィーチャーは、必ずチェックしてください。	はい

アップグレード、および共存についての考慮事項

前のバージョンの製品がある場合、または同じワークステーションに複数の Rational Software Delivery Platform 製品をインストールする計画がある場合は、このセクションの情報を確認してください。

IBM Rational Functional Tester バージョン 6.1.x からのアップグレード

Rational Functional Tester バージョン 6.1.x がインストールされているコンピューターには、IBM Rational Functional Tester バージョン 7.x をインストールできません。IBM Rational Functional Tester バージョン 7.x のインストールを試みる前に、古いバージョンの Functional Tester をすべてアンインストールしなければなりません。Rational Functional Tester バージョン 7.x のインストール中にバージョン 6.1.x 製品のインストールが検出された場合、インストール・ルーチンは停止します。このソフトウェアのアンインストール方法については、前の製品の資料を参照してください。

注: バージョン 6.1.x パッケージをアンインストールしても、プロジェクト資産は削除されません。

IBM Rational Functional Tester の以前のバージョンからのテスト資産のマイグレーション

プロジェクト、スクリプト、オブジェクト・マップ、検査ポイントを含め、Rational Functional Tester の以前のバージョンからのテスト資産はすべて、当製品の現行バージョンで動作します。ただし、現行バージョンの製品で記録されたスクリプトは、以前のバージョンでは動作しません。

IBM Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 1.x のバージョン 7.0.1 へのアップグレード

IBM Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 は、IBM Rational Functional Tester バージョン 7.0.1 フル CD イメージを使用する場合に限り入手できます。Rational Functional Tester および Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 のインストールを試みる前に、Rational Functional Tester バージョン 6.1.x および Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 1.x をアンインストールしなければなりません。このソフトウェアのアンインストール方法については、前の製品の資料を参照してください。

注: Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 1.x をアンインストールしてから、Functional Tester バージョン 6.1.x をアンインストールしてください。このソフトウェアのアンインストール方法については、前の製品の資料を参照してください。

製品の共存についての考慮事項

一部の製品は、同じパッケージ・グループにインストールされた場合、他の製品と共存し、機能を共有するように設計されています。パッケージ・グループは、1 つ以上のソフトウェア製品またはパッケージをインストールできるロケーションです。各パッケージをインストールする場合は、そのパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールするか、または新規にパッケージ・グループを作成するかを選択します。IBM Installation Manager は、共有するように設計されていない製品や、バージョンの許容度およびその他の要件を満たさない製品をブロックします。一度に複数の製品をインストールする場合は、それらの製品間でパッケージ・グループを共有できなければなりません。

リリース時点で、1 つのパッケージ・グループにインストールされた場合に機能を共有する製品は、以下のとおりです。

- Rational Application Developer
- Rational Software Architect
- Rational Functional Tester
- Rational Performance Tester
- Rational Software Modeler
- Rational Systems Developer
- Rational Tester for SOA Quality

適格製品であれば、1 つのパッケージ・グループにいくつでもインストールできます。製品がインストールされると、その機能はパッケージ・グループ内の他のすべての製品で共有されます。開発製品とテスト製品を 1 つのパッケージ・グループにインストールする場合、製品のいずれか一方を始動すると、開発とテストの両方の機能がユーザー・インターフェースで使用可能になります。モデリング・ツールを持つ製品を追加すると、パッケージ・グループ内のすべての製品で、開発、テストおよびモデリングの機能が使用可能になります。

開発製品をインストールし、その後で追加の機能を持つ開発製品を購入して、同じパッケージ・グループにその製品を追加すると、両方の製品で追加の機能が使用可能になります。より多くの機能を持つ製品をアンインストールした場合、元の製品はそのまま残ります。これは、Rational Software Delivery Platform グループにおけるバージョン 6 製品の「アップグレード」の動作から変更された点であることに注意してください。

注: 1 つのロケーションにのみインストールされた製品は、1 つのパッケージ・グループにのみ関連付けることが許されます。複数のパッケージ・グループと関連付けるためには、製品を複数のロケーションにインストールする必要があります。Rational Functional Tester および Rational Performance Tester は、1 台のコンピューター上では、1 つのロケーションにしかインストールできません。そのため、1 つのパッケージ・グループにしかインストールできません。

インストール・リポジトリ

IBM Installation Manager は、指定のリポジトリ・ロケーションから製品パッケージを取得します。

ランチパッドを使用して Installation Manager を開始すると、リポジトリ情報が Installation Manager に渡されます。Installation Manager を直接開始した場合は、インストールする製品パッケージが格納されたインストール・リポジトリを指定する必要があります。『Installation Manager のリポジトリ設定』を参照してください。

製品パッケージをイントラネットに組み込んでホスティングしている企業や組織もあります。この種のインストール・シナリオについては、12 ページの『HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリからのインストール』を参照してください。システム管理者から正しい URL を提供してもらう必要があります。

デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれている URL を使用して、インターネットを介してリポジトリ・サーバーに接続します。その後、Installation Manager が製品パッケージと新規フィーチャーを検索します。

Installation Manager のリポジトリ設定

Rational Functional Tester のインストールをランチパッド・プログラムから開始する場合は、IBM Installation Manager の開始時に、インストールする製品パッケージを含むリポジトリのロケーションが Installation Manager に自動的に定義されます。しかし、直接 Installation Manager を開始する場合 (例えば、Rational Functional Tester を Web サーバー上にあるリポジトリからインストールする場合) は、まず Installation Manager でリポジトリ設定 (製品パッケージが含まれるディレクトリの URL) を指定しておかなければ、製品パッケージはインストールできません。このリポジトリ・ロケーションは、「設定」ウィンドウの「リポジトリ」ページで指定します。デフォルトでは、IBM Installation Manager は、各 Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれている URL を使用して、インターネットを介してリポジトリ・サーバーに接続し、インストール可能なパッケージおよび新規フィーチャーを検索します。組織によっては、イントラネット・サイトを使用するためにリポジトリをリダイレクトする必要があります。

注: インストール・プロセスを開始する前に、必ず管理者からインストール・パッケージのリポジトリの URL を取得してください。

Installation Manager でリポジトリ・ロケーションを追加、編集、または除去するには、以下のようにします。

1. Installation Manager を開始します。
2. Installation Manager の「スタート」ページで、「ファイル」→「設定」をクリックしてから「リポジトリ」をクリックします。「リポジトリ」ページが開きます。このページには、使用可能なリポジトリ、そのロケーション、およびアクセス可能かどうかが表示されます。
3. 「リポジトリ」ページで、「リポジトリの追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ウィンドウで、リポジトリ・ロケーションの URL を入力するか、ブラウズしてファイル・パスを設定します。
5. 「OK」をクリックします。HTTPS または制限付き FTP リポジトリ・ロケーションを指定した場合は、ユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプト

が出されます。新規または変更されたリポジトリ・ロケーションがリストされます。リポジトリがアクセス不可の場合は、「**接続**」列に赤い x が表示されます。

6. 「**OK**」をクリックして終了します。

注: インストール済みパッケージのデフォルトのリポジトリ・ロケーションを Installation Manager が検索できるように、「リポジトリ」の設定ページで「**インストールと更新を行っている間にサービス・リポジトリをサーチします**」の設定が選択されていることを確認します。この設定はデフォルトで選択されています。

パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリー

IBM Installation Manager を使用して Rational Functional Tester パッケージをインストールする場合は、パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリーを選択する必要があります。

パッケージ・グループ

インストール・プロセス中に、Rational Functional Tester パッケージのパッケージ・グループを指定する必要があります。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。

Installation Manager を使用して Rational Functional Tester パッケージをインストールする場合は、新規パッケージ・グループを作成するか、またはパッケージを既存のパッケージ・グループにインストールできます。(一部のパッケージは、パッケージ・グループを共用できない場合があります。その場合、既存パッケージ・グループを使用するオプションが使用不可になります。)

一度に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされる点に注意してください。

パッケージ・グループには自動的に名前が割り当てられます。ただし、パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーは選択できます。

製品パッケージのインストールが成功し、パッケージ・グループが作成された後に、インストール・ディレクトリーを変更することはできません。インストール・ディレクトリーには、パッケージ・グループにインストールされた Rational Functional Tester 製品パッケージに固有のファイルおよびリソースが含まれます。他のパッケージ・グループに使用される可能性のある製品パッケージ内のリソースは、共用リソース・ディレクトリーに置かれます。

注: Functional Tester Extension for Terminal Based Applications パッケージは、Functional Tester パッケージ・グループにのみインストールできます。

重要: 管理者特権を持たないユーザーが Rational Functional Tester を Windows Vista オペレーティング・システム上で操作するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内のディレクトリーを選択しないでください。

共用リソース・ディレクトリー

共用リソース・ディレクトリー は、1 つ以上の製品パッケージ・グループで使用できるようにインストール作成物を配置するディレクトリーです。

重要:

- 共用リソース・ディレクトリーは、パッケージの初回インストール時に指定できます。最良の結果を得るには、一番大きいドライブを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、ディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。
- 管理者特権を持たないユーザーが Rational Functional Tester を Windows Vista システム上で操作するには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内のディレクトリーを選択しないでください。

既存の Eclipse IDE の拡張

Rational Functional Tester 製品パッケージをインストールする際に、コンピューターにすでにインストールされている Eclipse 統合開発環境 (IDE) の拡張を選択できます。拡張は、Rational Functional Tester パッケージに含まれている機能を追加することによって実現できます。

IBM Installation Manager を使用してインストールされた Rational Functional Tester パッケージには、いずれかのバージョンの Eclipse IDE、つまりワークベンチが組み込まれています。この組み込まれたワークベンチは、Installation Manager パッケージの機能を提供する際の基本プラットフォームになります。ただし、ワークステーション上に既存の Eclipse IDE がある場合は、この IDE を拡張 するかどうかを選択可能です。つまり、Rational Functional Tester パッケージで提供される追加機能を、IDE に追加するかどうかを選択できます。

既存の Eclipse IDE を拡張するには、「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで、「既存の Eclipse IDE の拡張」オプションを選択します。

重要: 管理者特権を持たないユーザーが Rational Functional Tester を Windows Vista オペレーティング・システム上で操作できるようにするには、Program Files ディレクトリー (C:\Program Files) 内に Eclipse をインストールしないでください。

既存の Eclipse IDE を拡張するのは、例えば、Rational Functional Tester パッケージで提供されている機能を使いたいが、Rational Functional Tester パッケージが提供する機能で作業するときに、現行 IDE の設定も保持したい場合です。また、Eclipse IDE の拡張プラグインがすでにインストール済みで、このプラグインを使用して作業をしたいという場合も考えられます。

eclipse.org から提供される最新の更新を拡張するには、既存の Eclipse IDE はバージョン 3.2.2 でなければなりません。Installation Manager は、指定した Eclipse インスタンスがインストール・パッケージの要件を満たしているか検査します。

注: 更新を Rational Functional Tester にインストールするには、Eclipse バージョンの更新が必要な場合があります。前提となる Eclipse バージョンへの変更については、更新情報のリリース文書を参照してください。

プリインストール・タスク

製品をインストールする前に、以下のステップを実行しておく必要があります。

1. ご使用のシステムが 5 ページの『インストール要件』のセクションに記載されている要件を満たしていることを確認します。
2. ご使用のユーザー ID が製品のインストールに必要なアクセス権を満たしていることを確認します。8 ページの『ユーザー特権についての要件』を参照してください。
3. 11 ページの『インストール計画』のセクションを一読します。14 ページの『アップグレード、および共存についての考慮事項』のトピックをよくお読みください。
4. Linux の場合: root 以外のユーザーも製品を使用できるようにしたい場合は、**製品をインストールする前に**、umask 変数を 0022 に設定する必要があります。この変数を設定するには、root ユーザーとしてログインして端末セッションを開始し、umask 0022 と入力してください。

インストール作業

以降のセクションでは、11 ページの『インストール・シナリオ』セクションに記載されているインストール・シナリオの概要を示します。詳しい説明には、メイン・ステップのリンクからアクセスできます。

Rational Functional Tester の CD-ROM からのインストール: 作業の概要

このインストール・シナリオでは、インストール・ファイルが含まれている CD を持っており、通常は、そこからワークステーション上に Rational Functional Tester をインストールします。

CD からインストールする一般的な手順は、次のとおりです。

1. 19 ページの『プリインストール・タスク』 にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. 1 枚目のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
3. Linux の場合: CD ドライブをマウントします。
4. システムで自動実行が使用可能になっている場合は、Rational Functional Tester ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。自動実行が使用不可の場合は、ランチパッド・プログラムを開始してください。詳しくは、33 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
5. ランチパッドから Rational Functional Tester のインストールを開始します。詳しくは、34 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

IBM Installation Manager がワークステーション上に検出されない場合は、それをインストールしてから続行する必要があります。ウィザードの指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、27 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。

Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、既にコンピューター上にある場合は、Installation Manager が自動的に開始します。

6. 「パッケージのインストール」をクリックし、「パッケージのインストール」ウィザードの指示に従って、インストールを完了します。詳しくは、35 ページの『Installation Manager GUI を使用した Rational Functional Tester のインストール』を参照してください。
7. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Functional Tester のトライアル・ライセンスが含まれています。引き続き製品にアクセスできるように、ライセンスを構成する必要があります。詳しくは、59 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
8. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、65 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。

9. Rational Functional Tester と一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアをインストールします。

ワークステーション上の電子イメージからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要

電子インストール・イメージから Rational Functional Tester をインストールする場合の一般的な手順は、次のとおりです。

1. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要のあるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なスペースが、ワークステーションにあることを確認してください。5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、一時ディレクトリーにすべてダウンロードします。
3. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、31 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。
4. 続けて、下記の『電子イメージからのインストール』のステップを実行します。

電子イメージからのインストール

1. 19 ページの『プリインストール・タスク』にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。詳しくは、33 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. ランチパッドから Rational Functional Tester のインストールを開始します。詳しくは、34 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

IBM Installation Manager がワークステーション上に検出されない場合は、それをインストールしてから続行する必要があります。ウィザードの指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、27 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。

Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、既にシステム上にある場合は、Installation Manager が自動的に開始します。

注: 製品インストールが完了する前に Installation Manager を終了した場合、ランチパッドから Installation Manager を再起動する必要があります。
Installation Manager を直接開始した場合は、必要なインストール・リポジトリによる事前設定は行われません。

4. 「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、35 ページの『Installation Manager GUI を使用した Rational Functional Tester のインストール』を参照してください。

5. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Functional Tester のトライアル・ライセンスが含まれています。引き続き製品にアクセスできるように、ライセンスを構成する必要があります。詳しくは、59 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
6. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、65 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
7. Rational Functional Tester と一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアをインストールします。

共用ドライブ上の電子イメージからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要

このシナリオでは、お客様は共用ドライブ上に電子イメージを置いて、社内のユーザーが 1 つのロケーションから Rational Functional Tester のインストール・ファイルにアクセスできるようにします。

共用ドライブ上にインストール・イメージを置く人が、以下のステップを実行します。

1. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要があるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、共用ドライブにあることを確認してください。詳しくは、5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、共用ドライブ上の一時ディレクトリーにすべてダウンロードします。
3. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを共用ドライブ上のアクセス可能なディレクトリーに抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、31 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。

共用ドライブ上のインストール・ファイルから Rational Functional Tester をインストールするには、以下のようにします。

1. インストール・イメージが含まれている共用ドライブの disk1 ディレクトリーに移動します。
2. 22 ページの『電子イメージからのインストール』のステップに従います。

HTTP または HTTPS Web サーバー上のリポジトリーからの Rational Functional Tester のインストール: タスクの概要

このシナリオでは、製品パッケージは IBM Installation Manager によって HTTP または HTTPS Web サーバーから取得されます。

以下のステップは、Rational Functional Tester パッケージを含むリポジトリーが HTTP または HTTPS Web サーバー上に作成されていることを前提としています。

Rational Functional Tester パッケージを HTTP または HTTPS サーバー上のリポジトリーからインストールするには、以下のようにします。

1. 19 ページの『プリインストール・タスク』 にリストされているプリインストールのステップをすべて実行します。
2. IBM Installation Manager をインストールします。27 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。このシナリオでは、例えば Installation Manager のインストール・ファイルは共用ドライブから入手できます。
3. 「Installation Manager」を開始します。詳しくは、28 ページの『Windows での Installation Manager の開始』を参照してください。
4. Rational Functional Tester パッケージが含まれているリポジトリの URL を、Installation Manager のリポジトリとして設定します。16 ページの『Installation Manager のリポジトリ設定』を参照してください。
5. Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードを開始し、「パッケージのインストール」ウィザードのスクリーン内の指示に従って、インストールを完了します。詳しくは、35 ページの『Installation Manager GUI を使用した Rational Functional Tester のインストール』を参照してください。
6. ライセンスを構成します。デフォルトで、Rational Functional Tester のトライアル・ライセンスが含まれています。ライセンスを設定して、引き続きアクセスして製品で作業ができることを確認してください。詳しくは、59 ページの『ライセンスの管理』を参照してください。
7. Linux の場合: ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やします。詳しくは、65 ページの『Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす』を参照してください。
8. Rational Functional Tester と一緒に組み込まれているオプションのソフトウェアをインストールします。

HTTP Web サーバー上へ Rational Functional Tester を配置: タスクの概要

HTTP Web サーバー上にあるリポジトリから、インストールのために Rational Functional Tester を準備するには、次のようにします。

1. ご使用の HTTP または HTTPS Web サーバーに、製品パッケージを保管するのに十分なディスク・スペースがあることを確認します。5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. IBM パスポート・アドバンテージからダウンロードする必要があるファイルと抽出したインストール・イメージの両方を保管するのに十分なディスク・スペースが、ワークステーションにあることを確認してください。5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
3. IBM パスポート・アドバンテージから製品イメージの必要な部分を、ワークステーション上の一時ディレクトリにすべてダウンロードします。
4. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージをワークステーション上の別の一時ディレクトリに抽出し、インストール・イメージが完全であることを確認します。詳しくは、31 ページの『電子イメージの確認および解凍』を参照してください。
5. ご使用のプラットフォームに適した Enterprise Deployment CD (または電子イメージ) から、ワークステーションに IBM Packaging Utility をインストールします。

6. Packaging Utility を使用して、 Rational Functional Tester 製品パッケージをコピーします。
7. Packaging Utility の出力を HTTP または HTTPS Web サーバーにコピーします。
8. IBM Installation Manager のインストール・ファイルを、Enterprise Deployment CD から共用ドライブにコピーします。
9. 社内ユーザーに Installation Manager をインストールするよう指示します。
10. 以前に作成済みの Rational Functional Tester 製品パッケージが含まれているリポジトリの URL をユーザーに提供します。

IBM Installation Manager の管理

このセクションでは、IBM Installation Manager に関連するいくつかの共通タスクについて説明します。詳細については、Installation Manager オンライン・ヘルプまたは <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1m0r0/index.jsp> の Installation Manager のインフォメーション・センターを参照してください。

Windows への Installation Manager のインストール

ランチパッド・プログラムから製品のインストールを開始すると、IBM Installation Manager がまだワークステーションにインストールされていない場合は、インストールが自動的に開始されます。(このプロセスの詳細については、33 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。) それ以外の場合は、Installation Manager のインストールを手動で開始する必要があります。

Installation Manager のインストールを手動で開始するには、以下のようにします。

- 1 枚目のインストール・ディスクの `InstallerImage_win32` フォルダーから、`install.exe` を実行します。
- 「パッケージのインストール」ページで「次へ」をクリックします。
- 「ご使用条件」ページの使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。
- 必要に応じて、「宛先フォルダー」ページの「参照」ボタンをクリックして、インストール場所を変更します。「次へ」をクリックします。
- 「要約」ページで「インストール」をクリックします。インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。
- 「終了」をクリックします。IBM Installation Manager が開きます。

Linux への Installation Manager のインストール

IBM Installation Manager は、ランチパッドによってインストールされます。このプロセスについて詳しくは、33 ページの『ランチパッド・プログラムからのインストール』を参照してください。

Installation Manager を手動でインストールするには、以下のようにします。

1. `root` ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. 1 枚目のインストール・ディスクの `InstallerImage_linux` フォルダーから、`install` を実行します。
3. 「パッケージのインストール」画面で「次へ」をクリックします。
4. 「ご使用条件」ページの使用条件を読み、「使用条件の条項に同意します」を選択して同意します。「次へ」をクリックします。

5. 必要に応じてインストール・ディレクトリー・ロケーションを編集します。「次へ」をクリックします。
6. 情報の要約ページで「インストール」をクリックします。インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。
7. 「終了」をクリックします。IBM Installation Manager が開きます。

Windows での Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから開始してください。そうすると、Installation Manager が、リポジトリー設定を構成し、Rational Functional Tester パッケージを選択した状態で起動します。Installation Manager を直接開始した場合は、リポジトリーの設定と製品パッケージの選択を手動で行う必要があります。詳しくは、11 ページの『インストール計画』を参照してください。

Installation Manager を手動で開始するには、以下のようにします。

1. タスクバーの「スタート」メニューを開きます。
2. 「すべてのプログラム」 → 「IBM Installation Manager」 → 「IBM Installation Manager」を選択します。

Linux での Installation Manager の開始

IBM Installation Manager は、ランチパッド・プログラムから開始してください。そうすると、Installation Manager が、リポジトリー設定を構成し、Rational Functional Tester パッケージを選択した状態で起動します。Installation Manager を直接開始する場合は、リポジトリーの設定と製品パッケージの選択を手動で行う必要があります。詳しくは、11 ページの『インストール計画』を参照してください。

Installation Manager を手動で開始するには、以下のようにします。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. Installation Manager のインストール・ディレクトリー (デフォルトでは /opt/IBM/InstallationManager/eclipse) に移動し、IBMIM を実行します。

Windows での Installation Manager のアンインストール

Installation Manager をアンインストールするには、以下のようにします。

1. タスクバーの「スタート」メニューを開きます。
2. 「すべてのプログラム」 → 「IBM Installation Manager」 → 「IBM Installation Manager のアンインストール」を選択します。
3. 「アンインストール」ページで「次へ」をクリックします。IBM Installation Manager がアンインストール対象として選択されます。
4. 「要約」ページで「アンインストール」をクリックします。

注: Installation Manager のアンインストールは、「コントロール パネル」を使用して行うこともできます。この場合、「スタート」 → 「設定」 → 「コントロー

ル パネル」とクリックし、「プログラムの追加と削除」をダブルクリックします。「IBM Installation Manager」の項目を選択し、「削除」をクリックします。

Linux での Installation Manager のアンインストール

IBM Installation Manager のアンインストールには、Linux バージョンに組み込まれているパッケージ管理ツールを使用する必要があります。

Linux で Installation Manager を手動でアンインストールするには、以下のようになります。

1. root ユーザー特権でターミナル・ウィンドウを開きます。
2. Installation Manager のアンインストール・ディレクトリーに移動します。これは、デフォルトでは `/var/ibm/InstallationManager/uninstall` です。
3. `./uninstall` を実行します。

Installation Manager のサイレント・インストールとアンインストール

IBM Installation Manager はサイレントでインストールおよびアンインストールすることができます。

Installation Manager のサイレント・インストール

Installation Manager をサイレントでインストールするには、インストーラーを `unzip` して `InstallerImage_platform` サブディレクトリーに切り替えます。次に、以下のコマンドを使用します。

- Windows の場合: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例えば、`installc --launcher.ini silent-install.ini -log c:\mylogfile.xml` のようになります。
- 他のプラットフォームの場合: `install --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスと名前>`。例えば、`install --launcher.ini silent-install.ini -log /root/mylogs/mylogfile.xml` のようになります。

インストールの後に、Installation Manager または Installation Manager インストーラーを使用してパッケージをサイレントでインストールできます。

Windows からの Installation Manager のサイレント・アンインストール

Windows で Installation Manager をサイレントでアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行から、Installation Manager の `uninstall` ディレクトリーに移動します。これは、デフォルトでは `C:\Documents and Settings\%All Users%\Application Data\IBM\Installation Manager\uninstall` です。
2. コマンド `uninstallc.exe --launcher.ini silent-uninstall.ini` を入力します。

他のプラットフォームでの Installation Manager のサイレント・アンインストール

他のプラットフォームで Installation Manager をサイレントでアンインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. ターミナル・ウィンドウから、Installation Manager のアンインストール・ディレクトリーに移動します。これは、デフォルトでは `/var/ibm/InstallationManager/uninstall` です。
2. コマンド `uninstall --launcher.ini silent-uninstall.ini` を実行します。

電子イメージの確認および解凍

IBM パスポート・アドバンテージからインストール・ファイルをダウンロードした場合は、圧縮ファイルから電子イメージを解凍してから、Rational Functional Tester および Functional Tester Extension for Terminal Based Applications をインストールしてください。

インストール・ファイルをダウンロードするために「Download Director」オプションを選択すると、「Download Director」アプレットによって、処理される各ファイルの完全性が自動的に検査されます。

ダウンロードしたファイルの解凍

圧縮ファイルは、それぞれ同じディレクトリーに解凍します。Linux の場合: ディレクトリー名にスペースを使用しないでください。スペースを使用すると、コマンド行からランチパッドを開始するための `launchpad.sh` コマンドを実行できなくなります。

ランチパッド・プログラムからのインストール

ランチパッド・プログラムを使用すると、1つのロケーションでリリース情報の表示およびインストール・プロセスの開始を行うことができます。

次の場合に、ランチパッド・プログラムを使用して Rational Functional Tester および Functional Tester Extension for Terminal Based Applications のインストールを開始します。

- 製品 CD からのインストール
- ローカル・ファイル・システム上の電子イメージからのインストール
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

インストール・プロセスをランチパッド・プログラムから開始すると、IBM Installation Manager は、既にコンピューター上にインストールされていない場合は自動的にインストールされ、Rational Functional Tester パッケージが含まれているリポジトリのロケーションで事前に構成された状態で起動します。Installation Manager を直接インストールして開始する場合は、手動でリポジトリ設定を行う必要があります。

ランチパッドからインストールするには、以下のようにします。

1. プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、19ページの『プリインストール・タスク』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。
2. ランチパッド・プログラムを開始します。『ランチパッド・プログラムの開始』を参照してください。
3. Rational Functional Tester のインストールを開始します。34ページの『ランチパッド・プログラムからのインストールの開始』を参照してください。

「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストールを完了します。詳しくは、35ページの『Installation Manager GUI を使用した Rational Functional Tester のインストール』を参照してください。

ランチパッド・プログラムの開始

プリインストール・タスクをまだ行っていない場合は、19ページの『プリインストール・タスク』に記載されているプリインストール・タスクを完了します。

CD からインストールする場合に、ワークステーション上で自動実行が使用可能になっているときは、1枚目のインストール・ディスクを CD ドライブに挿入すると、Rational Functional Tester ランチパッドが自動的に開始します。電子イメージからインストールする場合、もしくは、ワークステーション上で自動実行が未構成な場合は、ランチパッド・プログラムを手動で開始する必要があります。

ランチパッド・プログラムを開始するには、以下のようにします。

1. IBM Rational Functional Tester CD を CD ドライブに挿入します。Linux の場合: CD ドライブがマウントされていることを確認します。

- システムで自動実行が使用可能になっている場合は、IBM Rational Functional Tester ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。システムで自動実行が使用不可の場合は、以下のようにします。
 - Windows の場合: CD のルート・ディレクトリーにある launchpad.exe を実行します。
 - Linux の場合: CD のルート・ディレクトリーにある launchpad.sh を実行します。

ランチパッド・プログラムからのインストールの開始

- ランチパッド・プログラムを開始します。
- リリース情報をまだ読んでいない場合は、「リリース・ノート」をクリックしてお読みください。
- インストールの開始準備ができれば、「**IBM Rational Functional Tester のインストール**」をクリックします。
- IBM Installation Manager がシステム上で検出されない場合、または以前のバージョンが既にインストールされている場合は、最新のリリースをインストールして続行する必要があります。
- ウィザードの指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、27 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
- IBM Installation Manager のインストールが正常に完了したら、「終了」をクリックしてウィザードを閉じます。インストールが完了したら、IBM Installation Manager が自動的に開きます。
- 新規インストールの場合は、「**パッケージのインストール**」をクリックし、ウィザードの指示に従ってインストール・プロセスを完了します。詳しくは、35 ページの『Installation Manager GUI を使用した Rational Functional Tester のインストール』を参照してください。

注: Rational Functional Tester バージョン 7.0.1 では、IBM Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 をインストールできます。

- 製品の更新の場合は、「**パッケージの更新**」をクリックし、ウィザードの指示に従って更新プロセスを完了します。詳しくは、69 ページの『Rational Functional Tester の更新』を参照してください。

注: Rational Functional Tester をバージョン 7.0.1 に更新した後、IBM Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 をインストールできます。

Installation Manager GUI を使用した Rational Functional Tester のインストール

以下のステップでは、IBM Rational Functional Tester パッケージの Installation Manager グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) によるインストールについて説明します。Functional Tester Extension for Terminal-based Applications バージョン 7.0.1 のライセンスを持っている場合は、Installation Manager を使用すると、Functional Tester 7.0.1 と共に Extension for Terminal-based Applications をインストールできます。

1. Installation Manager のスタート・ページで、「パッケージのインストール」をクリックします。

注: Installation Manager の新しいバージョンが検出されると、そのバージョンのインストールの確認を求めるプロンプトが表示されます。これを確認しないと、続行することはできません。「OK」をクリックして先に進みます。Installation Manager は自動的に、新しいバージョンのインストール、停止、再始動、および再開を実行します。

2. 「パッケージのインストール」ウィザードの「インストール」ページに、Installation Manager が検索したリポジトリ内で検出されたすべてのパッケージがリストされます。2 つのバージョンのパッケージが検出された場合は、最新バージョンまたは推奨バージョンのパッケージのみが表示されます。
 - Installation Manager で検出されたすべてのバージョンのパッケージを表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックします。
 - 推奨パッケージのみの表示に戻すには、「推奨のみを表示」をクリックします。

注: Rational Functional Tester バージョン 7.0.1 フル CD イメージを使用して Functional Tester 7.0.1 をインストールする場合は、「インストール」ページに Functional Tester Extension for Terminal-based Applications 7.0.1 パッケージがリストされます。

3. IBM Rational Functional Tester パッケージをクリックすると、「詳細」ペインにその説明が表示されます。

注: 同様に、Functional Tester Extension for Terminal-based Applications パッケージの詳細を確認できます。

4. IBM Rational Functional Tester パッケージに対する更新を検索するには、「他のバージョンおよび拡張の検査」をクリックします。

注: Installation Manager が定義済みの IBM 更新リポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索するには、「リポジトリ」の設定ページで「インストールと更新を行っている間にリンクされたリポジトリをサーチします」設定を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。インターネットへのアクセスも必要です。

Installation Manager は、製品パッケージの定義済みの IBM 更新リポジトリで更新を検索します。リポジトリ・ロケーションを設定しておけば、そこも

検索します。進行状況表示に検索状況が表示されます。基本製品パッケージのインストールと同時に更新もインストールできます。

5. IBM Rational Functional Tester パッケージの更新が検出されると、「パッケージのインストール」ページの各製品の下に「インストール・パッケージ」リストにそれらが表示されます。デフォルトでは、推奨される更新のみが表示されます。
 - 使用可能なパッケージ用に検出された更新をすべて表示するには、「すべてのバージョンを表示」をクリックします。
 - 「詳細」でパッケージの説明を表示するには、パッケージ名をクリックします。README ファイルやリリース・ノートなど、パッケージに関する追加情報が入手可能な場合は、説明本文の最後に「詳細情報」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザーに追加情報が表示されます。インストールするパッケージを完全に理解するためには、事前にすべての情報を検討しておくようにしてください。

注: 同様に、Functional Tester Extension for Terminal-based Applications パッケージの更新を検索できます。

6. インストールする IBM Rational Functional Tester パッケージおよびそのパッケージに対する更新 (ある場合) を選択します。依存関係のある更新は、自動でまとめて選択およびクリアされます。「次へ」をクリックして続けます。

注: Functional Tester Extension for Terminal-based Applications をインストールするには、IBM Rational Functional Tester Extension for Terminal-based Applications パッケージを選択します。

注: 一度に複数のパッケージをインストールする場合は、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされます。

7. 「ライセンス」ページで、選択したパッケージのご使用条件をお読みください。

複数のパッケージをインストールするよう選択した場合は、各パッケージにご使用条件がある場合があります。「ライセンス」ページの左側で、各パッケージのバージョンをクリックして、ご使用条件を表示してください。インストールするために選択したパッケージのバージョン (例えば、基本パッケージおよび更新) は、パッケージ名の下にリストされます。

- a. ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「使用条件の条項に同意します」をクリックします。
 - b. 「次へ」をクリックして続けます。
8. 「ロケーション」ページで、「共用リソース・ディレクトリー」フィールドに共用リソース・ディレクトリー のパスを入力するか、デフォルト・パスを受け入れます。共用リソース・ディレクトリーには、1 つ以上のパッケージ・グループが共用できるリソースが含まれています。「次へ」をクリックして続けます。

デフォルト・パスは次のとおりです:

- Windows の場合: C:\Program Files\IBM\SDP70Shared
- Linux の場合: /opt/IBM/SDP70Shared

重要: 共用リソース・ディレクトリーは、パッケージの初回インストール時のみ指定できます。将来のパッケージの共用リソースに十分なスペースを確保するために、これには一番大きいディスクを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、ディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。

注: インストール・パスに括弧が含まれていないことを確認します。

9. 「ロケーション」 ページで、**IBM Rational Functional Tester** パッケージをインストールするためのパッケージ・グループを作成します。あるいは、更新の場合は、既存のパッケージ・グループを使用します。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。新しいパッケージ・グループを作成するには、以下のようになります。

- a. 「**新規パッケージ・グループの作成**」 をクリックします。
- b. パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーのパスを入力します。パッケージ・グループの名前が自動的に作成されます。

デフォルト・パスは次のとおりです:

- Windows の場合: C:\Program Files\IBM\SDP70
- Linux の場合: /opt/IBM/SDP70

重要: Windows Vista では、Program Files ディレクトリーは、管理者として稼働していないユーザーがこの保護下のディレクトリーへの書き込み権限を持つことができるように、普通は仮想化されます。しかし、仮想化の解決策は、Rational Functional Tester とは互換性がありません。

- c. 「**次へ**」 をクリックして続けます。

注: Functional Tester Extension for Terminal-based Applications は、Functional Tester パッケージ・グループにのみインストールできます。

10. 次の「ロケーション」 ページで、インストールするパッケージに機能を追加して、システムにすでにインストールされている既存の Eclipse IDE を拡張することができます。このオプションを選択するには、eclipse.org から提供される最新の更新が適用された Eclipse バージョン 3.2.1 を使用している必要があります。

- 既存の Eclipse IDE を拡張しない場合は、「**次へ**」 をクリックして続けます。
- 既存の Eclipse IDE を拡張するには、以下のようになります。
 - a. 「**既存の Eclipse を拡張**」 を選択します。
 - b. 「**Eclipse IDE**」 フィールドに Eclipse 実行可能ファイル (eclipse.exe または eclipse.bin) が含まれているフォルダーのロケーションを入力するか、またはナビゲートします。Installation Manager は、Eclipse IDE のバージョンが、インストールするパッケージに有効であるかどうか検査します。「**Eclipse IDE JVM**」 フィールドに、指定した IDE の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。
 - c. 「**次へ**」 をクリックして続けます。

11. 「フィーチャー」ページの「言語」で、パッケージ・グループの言語を選択します。IBM Rational Functional Tester パッケージのユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションについて、対応する各国語翻訳がインストールされます。
12. 次の「フィーチャー」ページで、インストールするパッケージ・フィーチャーを選択します。
 - a. オプション: フィーチャー間の依存関係を表示するには、「**依存関係の表示 (Show Dependencies)**」を選択します。
 - b. オプション: フィーチャーをクリックすると、「**詳細**」の下に簡単な説明が表示されます。
 - c. パッケージのフィーチャーを選択またはクリアにします。Installation Manager は、他のフィーチャーとの依存関係を自動的に強制し、ダウンロード・サイズおよびインストールに必要なディスク・スペース所要量を更新して表示します。
 - d. フィーチャーの選択が終了したら、「**次へ**」をクリックして続けます。
13. IBM Rational Functional Tester パッケージをインストールする前に「要約」ページで選択項目を検査します。前のページで行った選択を変更したい場合は、「**戻る**」をクリックして変更を行います。選択がそのままであれば、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。進行状況表示にインストールの完了パーセントが表示されます。
14. インストール・プロセスが完了したら、プロセスが正常に行われたことを確認するメッセージが表示されます。
 - a. 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、新規ウィンドウで現行セッションのインストール・ログ・ファイルを開きます。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
 - b. 「パッケージのインストール」ウィザードで、終了時に IBM Rational Functional Tester を開始するかどうかを選択します。
 - c. 「完了」をクリックして、選択したパッケージを起動します。「パッケージのインストール」ウィザードが閉じ、Installation Manager の「スタート」ページに戻ります。

注: Functional Tester Extension for Terminal-based Application によって、システムに IBM Host On-Demand の IBM SWT HA Beans フィーチャーがインストールされます。IBM Host On-Demand の最新バージョンをシステムで使用できる場合、Extension for Terminal-based Application は、既にインストールされている IBM SWT HA Beans フィーチャーを使用します。Extension for Terminal-based Application には IBM Host On-Demand が必要なので、これをアンインストールしないでください。

Test Agent での作業

Test Agent は、テスト・スクリプトを実行できるリモート・コンピューターです。

Rational TestManager または Rational ClearQuest Test Manager を使用して、ローカル・コンピューターからテスト・アクティビティをリモート調整することができます。

テスト・スクリプトをリモートで実行するには、以下のステップを実行する必要があります。

1. Rational Functional Tester をローカル・コンピューターにインストールします。
2. IBM Rational TestManager v2003.06.15 (Service Release 5) 以降、または Rational ClearQuest Test Manager のいずれかをローカル・コンピューターにインストールします。
3. TestManager で作業するには、TestManager の CD にある Rational Test Agent ソフトウェア、および Rational Functional Tester の Agent フィーチャーをリモート・エージェントにインストールします。
4. Rational ClearQuest Test Manager で作業するには、Rational Functional Tester の Agent フィーチャーをリモート・エージェントにインストールします。(Rational Functional Tester は、Agent のみのインストール、または完全インストールすることができます。)
5. Rational Test Agent ソフトウェア、または IBM Rational Agent Controller をリモート・コンピューターで起動します。
6. リモート・システムの環境を使用可能にします。
7. リモート・システム上で実行するようにアプリケーションを構成します。

Windows への Rational Test Agent のインストール

このトピックでは、Rational Test Agent を Windows コンピューターにインストールする方法を説明します。

以下のステップを実行します。

1. 管理者権限でログオンします。
2. Rational Test Agent ソフトウェアを含む CD を CD ドライブに挿入します。
自動的にインストールが開始されない場合は、以下のステップを実行してください。
 - a. 「スタート」 → 「ファイル名を指定して実行」とクリックします。
 - b. `cd_drive:%SETUP.EXE` と入力します。
 - c. 「OK」をクリックします。
3. 「ソフトウェア・セットアップ」ページで、「次へ」をクリックします。
4. 「製品リスト」で、「**Rational Test Agent**」を選択します。
5. 「次へ」をクリックします。

6. ウィザードで提供されるすべてのデフォルトを選択します。 インストールを完了するために、システムを再起動する必要がある場合があります。
7. 最後のダイアログ・ボックスで「完了」をクリックします。

Rational Test Agent をインストールした後で、Rational Functional Tester CD にある Rational Functional Tester の Agent フィーチャーをインストールする必要があります。

Windows での Rational Test Agent の開始

このトピックでは、Test Agent を Windows コンピューターで開始する方法を説明します。

Rational Test Agent を Windows で開始するには、以下のステップを実行します。

1. 「スタート」 → 「すべてのプログラム」 → 「**Rational Test Agent**」 → 「**Rational Test**」 → 「**Rational Test Agent**」の順にクリックします。
2. Test Agent で使用するテスト環境を使用可能にします。
3. Test Agent でテストしたいアプリケーションを構成します。

Linux への Rational Test Agent のインストール

このトピックでは、Rational Test Agent を Linux コンピューターにインストールする方法を説明します。

始める前に、必ず古いバージョンの Rational Functional Tester および XDE™ Tester をすべてアンインストールして、環境変数をすべて使用不可にしてください。

以下のステップを実行します。

1. 管理者権限でログオンします。
2. 次のインストール・ディレクトリーを作成します。

```
% mkdir -p /usr/rational/test
```

3. Rational Test Agent ソフトウェアを含む CD-ROM を CD ドライブに挿入します。

CD が自動的にマウントされない場合は、Linux mount コマンドを以下のように入力してください。

```
% mount /dev/cdrom /mnt/cdrom
```

4. 以下のテスト・ディレクトリーに移動します。

```
% cd /usr/rational/test
```

5. 以下の tar コマンドを入力して、Rational Test Agent ファイルをハード・ディスクにコピーします。

```
% tar xzpf /mnt/cdrom/linux_agent.tar.gz
```

Linux での Rational Test Agent および RAServer の開始

このトピックでは、Rational Test Agent および RAServer を Linux で開始する方法を説明します。

Rational Test Agent を実行する前に、以下のコマンドのいずれかを入力して、RATL_RTHOME 環境変数を /usr/rational/test に設定する必要があります。

```
% export RATL_RTHOME=/usr/rational/test
```

```
% setenv RATL_RTHOME=/usr/rational/test
```

Rational Test Agent を Linux で開始するには、以下のようにします。

1. 環境変数 LD_LIBRARY_PATH を、現在使用している JRE の libjava.so に設定します。
2. CLASSPATH を <product installation directory>/bin/rational_ft.jar に設定します。
3. 以下のコマンドを実行します。

```
source <product installation directory>/rtsetup.
```

4. Test Manager のインストール・ディレクトリーから、RTsagt を実行します。

ClearQuest Test Manager をリモートで実行できるように RAServer を起動するには、以下のコマンドを製品のインストール・ディレクトリーから入力します。

```
ft_agent_start
```

次のコマンドを入力して、Test Agent が実行していることを確認できます。

```
ps -ef | grep rtprvd
```

次のコマンドを入力して、RAServer が実行していることを確認できます。

```
ps -ef | grep RAServer
```

Test Agent での環境の使用可能化

このトピックでは、Test Agent でテスト環境を使用可能にする方法を説明します。

Rational Functional Tester を初めて開始すると、機能テスト・スクリプトを実行するための環境が自動的に使用可能になります。ブラウザーを追加する場合や、新しい Java 環境を追加する場合は、追加した新しいブラウザーまたは Java 環境を使用可能にする必要があります。

Test Agent コンピューターにおいて、テスト・アクティビティーを調整し、機能テスト・スクリプトを実行するのに TestManager または Rational ClearQuest Test Manager を使用する場合は、そのスクリプトを実行するエージェント・コンピューターで環境を使用可能にする必要があります。

環境を使用可能にするには、以下のようにします。

1. 次のいずれかを実行して、Enabler を始動します。

- a. Windows の場合: rational_ft.jar ファイルがあるディレクトリー (デフォルトでは、<product installation directory>%FunctionalTester%bin) に移動して、コマンド行から次のように入力します。

```
java -jar rational_ft.jar -enable
```

注:

IBM JRE への絶対パスを入力する必要がある場合もあります。デフォルトでは、<product installation directory>%SDP70%jdk%jre%bin です。

- b. Linux の場合: コマンド行から、次のように入力します。

```
/opt/IBM/SDp7.0/ft_cmdline -enable
```

2. Enabler が起動したら、「**Web ブラウザー**」タブをクリックしてブラウザーを使用可能にします。
3. 「**Java 環境**」タブをクリックして、Java 環境を使用可能にします。
4. 「**OK**」をクリックします。

Test Agent でのアプリケーションの構成

このトピックでは、Test Agent でアプリケーションを構成する方法を説明します。

アプリケーションのテストを行う前に、アプリケーションを構成する必要があります。アプリケーションを構成する際には、テストを実行するアプリケーションの名前、パス、およびその他の情報を入力します。この情報は記録や再生の際に使用され、テスト・スクリプトの信頼性とポータビリティを高めめます。Test Agent コンピューターでのリモート実行に TestManager を使用する場合は、スクリプトを実行するエージェント・コンピューター上でアプリケーションを構成する必要があります。

アプリケーションを構成するには、次のステップを実行します。

1. アプリケーション構成ツールを開始するには、以下のようになります。
 - a. Windows の場合: rational_ft.jar ファイルがあるディレクトリー (デフォルトでは、<product installation directory>%FunctionalTester%bin) に移動して、コマンド行から次のように入力します。

```
java -jar rational_ft.jar -appConfig
```

注: IBM JRE への絶対パスを入力する必要がある場合もあります。デフォルトでは、<product installation directory>%SDP70%jdk%jre%bin です。

- b. Linux の場合: コマンド行から、次のように入力します。

```
/opt/IBM/SDp7.0/ft_cmdline -appconfig
```
2. 「**追加**」をクリックします。アプリケーション構成ツールが起動します。
3. アプリケーション・タイプを選択して、「**次へ**」をクリックします。
4. 以下のステップの 1 つを実行して、アプリケーションを構成します。
 - Java アプリケーションの場合は、「**参照**」をクリックして、追加する Java アプリケーションの .class または .jar ファイルを選択します。
 - HTML アプリケーションの場合は、以下のようになります。

- a. テストする HTML のタイプ (ローカルまたは URL) を選択します。
 - b. 「次へ」をクリックします。
 - c. URL を選択した場合は、テストに使用する URL を入力してから以下のステップ 6 に進みます。「ローカル」を選択した場合は、.htm ファイルまたは .html ファイルのロケーションを参照することもできますし、ファイルの絶対パス名を入力することもできます。次のステップに進みます。
- 実行可能ファイルまたはバッチ・ファイルの場合は、「参照」をクリックして、選択を行います。
5. 「開く」をクリックします。

「ファイル名」フィールドにファイル名とパスが表示されます。

6. 「終了」をクリックします。

アプリケーション構成ツールの「アプリケーション」リストにアプリケーションが表示されます。

7. 「詳細情報」リストに記載されている情報を確認します。

Java アプリケーションの場合、「名前」、「種類」、「パス」、「.class/.jar ファイル (.class/.jar file)」、および「作業ディレクトリ」の各フィールドは自動的に入力されます。「JRE」、「クラスパス」、「引数」の各フィールドはオプションです。

8. フィールド内の情報を必要に応じて編集します。詳しくは、製品のヘルプを参照してください。
9. 「実行」をクリックして、アプリケーションが正しく構成されたことを確認します。
10. 「OK」または「適用」をクリックして、変更内容を保管します。

注: アプリケーションを追加してから、アプリケーション構成ツールを開いて「アプリケーション」リストのアプリケーションを選択すると、その情報をいつでも編集することができます。「アプリケーション」リストからアプリケーションを除去するには、該当するアプリケーションを選択して「除去」をクリックします。

サイレント・インストール

Rational Functional Tester 製品パッケージは、Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行してインストールできます。Installation Manager をサイレント・モードで実行する場合は、ユーザー・インターフェースは使用できません。代わりに、Installation Manager は応答ファイルを使用して、製品パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。また、Installation Manager インストーラーを使用して、Installation Manager をサイレント・インストールすることもできます。さらに、インストーラーを使用すると、製品パッケージをサイレント・インストールできます。

Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、バッチ処理でスクリプトを通じて製品パッケージのインストール、更新、変更、およびアンインストールを行えるため便利です。

Rational Functional Tester パッケージをサイレント・インストールする前に、Installation Manager をインストールする必要があることに注意してください。Installation Manager のインストールについて詳しくは、27 ページの『IBM Installation Manager の管理』を参照してください。

サイレント・インストールに必要な主要なタスクは、以下の 2 つです。

1. 応答ファイルの作成。
2. Installation Manager のサイレント・インストール・モードでの実行。

Installation Manager を使用した応答ファイルの作成

Installation Manager、または Installation Manager インストーラーで Rational Functional Tester 製品パッケージをインストールするときのアクションを記録して、応答ファイルを作成することができます。応答ファイルを記録すると、Installation Manager の GUI で選択した項目がすべて XML ファイルに保管されます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、Installation Manager は XML 応答ファイルを使用して、パッケージが含まれているリポジトリの検索、インストールするフィーチャーの選択などを行います。

インストール (またはアンインストール) 用の応答ファイルを記録するには、以下のようになります。

1. コマンド行で、Installation Manager をインストールしたディレクトリーの eclipse サブディレクトリーに移動します。例:
 - Windows の場合: `cd C:\Program Files\IBM\Installation Manager\eclipse`
 - その他のプラットフォームの場合: `cd /opt/IBM/InstallationManager/eclipse`
2. コマンド行で次のコマンドを入力して、Installation Manager を開始します。応答ファイルおよび (オプションで) ログ・ファイルのファイル名およびロケーションは、ご使用のものに置き換えてください。

- IBMIM -record <応答ファイルのパスと名前> -log <ログ・ファイルのパスと名前>。例えば、IBMIM.exe -record c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\record_log.xml のようにします。
- オプションの -skipInstall <agentDataLocation> 引数を追加すると、製品をインストールまたはアンインストールせずに、応答ファイルを記録できます。<agentDataLocation> は書き込み可能ディレクトリーでなければならないことに注意してください。この引数によって、Installation Manager は、製品をインストールせずにインストール・データを保存します。次の記録セッションでも同じ <agentDataLocation> を使用して、製品の更新または変更を記録したり、ライセンス管理を記録したりすることができます。-skipInstall 引数を使用しないインストール時に設定したインストール済み製品または設定 (リポジトリ設定を含む) は、保管されないことに注意してください。-skipInstall を使用すると、IM は製品をインストールせずにインストール・データを記録するだけなので、インストール速度が速くなります。

skipInstall 引数を使用するための構文は、IBMIM -record <応答ファイルのパスと名前> -skipInstall <エージェント・データ・ロケーションの書き込み可能ディレクトリー> です。例えば、IBMIM -record c:\mylog\responsefile.xml -skipInstall c:\temp\recordData のようになります。

注: 入力するファイル・パスが存在することを確認してください。Installation Manager では、応答ファイルとログ・ファイル用のディレクトリーは作成されません。

3. 「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストール時の選択項目を選択します。詳しくは、35 ページの『Installation Manager GUI を使用した Rational Functional Tester のインストール』を参照してください。
4. 「終了」をクリックして Installation Manager を閉じます。

コマンドで指定したロケーションに XML 応答ファイルが作成されます。

Installation Manager インストーラーを使用した応答ファイルの記録

Installation Manager インストーラーを使用すると、Installation Manager およびその他の製品のインストールを記録できます。

Installation Manager のインストールを記録するには、以下のステップを実行します。

1. Installation Manager を unzip し、InstallerImage_platform ディレクトリーへ移動します。
2. 記録を開始するには、install -record <応答ファイルのパスと名前> -skipInstall <agentDataLocation> -vmargs -Dcom.ibm.cic.agent.hidden=false と入力します。

インストーラーを使用した製品インストールの記録

Installation Manager インストーラーを使用した製品インストールの記録を開始するには、以下のステップを実行します。

1. Installation Manager を unzip したロケーションにある `InstallerImage_platform` ディレクトリーに移動します。
2. `install.ini` ファイルを開き、`-input` と `@osgi.install.area/install.xml` の 2 行を除去します。
3. コマンド `install -record <応答ファイルのパスと名前> -skipInstall <agentDataLocation>` (例えば、`install -record` など) を入力します。
4. Installation Manager を開始し、「パッケージのインストール」ウィザードを完了します。

サイレント・モードでの Installation Manager のインストールと実行

Installation Manager インストーラーを使用して Installation Manager をインストールした後、Installation Manager を使用して、コマンド行からサイレント・インストール・モードで製品パッケージをインストールします。

サイレント・モードでの実行方法に関するその他の資料については、Installation Manager の Web サイトを参照してください。例えば、認証 (ユーザー ID とパスワード) を必要とするリポジトリーからのサイレント・インストールなどです。

次の表は、サイレント・インストール・コマンドで使用される引数を示したものです。

引数	説明
<code>-vm</code>	Java ランチャーを指定します。サイレント・モードでは、Windows の場合は必ず <code>java.exe</code> を使用し、その他のプラットフォームの場合は <code>java</code> を使用します。
<code>-nosplash</code>	スプラッシュ画面を抑制するように指定します。
<code>--launcher.suppressErrors</code>	JVM エラー・ダイアログを抑制するように指定します。
<code>-silent</code>	Installation Manager インストーラーまたは Installation Manager がサイレント・モードで実行されるように指定します。
<code>-input</code>	Installation Manager インストーラーまたは Installation Manager への入力として XML 応答ファイルを指定します。応答ファイルには、インストーラーまたは Installation Manager が実行するコマンドが含まれています。
<code>-log</code>	(オプション) サイレント・インストールの結果を記録するログ・ファイルを指定します。ログ・ファイルは XML ファイルです。

Installation Manager インストーラーと Installation Manager の両方に、初期化ファイルつまり `.ini` ファイル `silent-install.ini` があり、表に引数のデフォルト値が含まれています。

Installation Manager インストーラーは、Installation Manager をインストールするために使用します。Installation Manager をサイレント・インストールするには、以下のようにします。

Installation Manager をサイレントでインストールするには、インストーラーを unzip して eclipse サブディレクトリーに切り替えます。次に、以下のコマンドを使用します。

- Windows の場合: `installc --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスおよび名前>`。例えば、`installc --launcher.ini silent-install.ini -log c:\mylogfile.xml` のようになります。
- 他のプラットフォームの場合: `install --launcher.ini silent-install.ini -log <ログ・ファイルのパスと名前>`。例えば、`install --launcher.ini silent-install.ini -log /root/mylogs/mylogfile.xml` のようになります。

Installation Manager がインストールされた後、それを使用して、他の製品をインストールできます。また、Installation Manager インストーラーを使用して、製品をインストールすることもできます。

Installation Manager をサイレント・モードで実行するには、eclipse サブディレクトリーから次のコマンドを実行します。

- Windows の場合: `IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスと名前> -log <ログ・ファイルのパスと名前>`。例えば、`IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\silent_install_log.xml` のようになります。
- その他のプラットフォームの場合: `IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスと名前> -log <ログ・ファイルのパスと名前>`。例えば、`IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input /root/mylog/responsefile.xml -log /root/mylog/silent_install_log.xml` のようになります。

Installation Manager インストーラーを使用して製品をサイレント・インストールするには、eclipse ディレクトリーから、次のコマンドを入力します。

- Windows の場合: `installc.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスと名前> -log <ログ・ファイルのパスと名前>`。例えば、`installc --launcher.ini silent-install.ini -input c:\mylog\responsefile.xml -log c:\mylog\silent_install_log.xml` のようになります。
- その他のプラットフォームの場合: `install.exe --launcher.ini silent-install.ini -input <応答ファイルのパスと名前> -log <ログ・ファイルのパスと名前>`。例えば、`IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -input /root/mylog/responsefile.xml -log /root/mylog/silent_install_log.xml` のようになります。

Installation Manager インストーラーまたは Installation Manager がサイレント・インストール・モードで実行されます。応答ファイルが読み取られ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き込まれます。サイレント・インストール・モードで実行する場合、応答ファイルは必須ですが、ログ・ファイルはオプションです。この実行の結果、状況コードは成功時にはゼロ、失敗時はゼロ以外の数値が返されません。

すべての使用可能な製品の検索とサイレント・インストール

すべての使用可能な製品に対する更新をサイレントで検索してインストールすることができます。

すべての使用可能な製品を検索してサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行で、**Installation Manager** をインストールしたディレクトリーの `eclipse` サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。ログ・ファイル (オプション) のロケーションは、ご使用のものに置き換えてください。
 - Windows の場合: `IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -installAll -log <ログ・ファイルのパスと名前>`
 - その他のプラットフォームの場合: `IBMIM --launcher.ini silent-install.ini -installAll -log <ログ・ファイルのパスと名前>`

Installation Manager に認識されているすべての使用可能な製品がインストールされます。

現在インストールされているすべての製品に対する更新のサイレント・インストール

現在インストールされているすべての製品に対する更新をサイレントで検索してインストールすることができます。

すべての使用可能な製品に対する更新を検索してサイレントでインストールする場合は、次の手順に従ってください。

1. コマンド行で、**Installation Manager** をインストールしたディレクトリーの `eclipse` サブディレクトリーに移動します。
2. 以下のコマンドを入力して実行します。ログ・ファイル (オプション) のロケーションは、ご使用のものに置き換えてください。
 - Windows の場合: `IBMIMc.exe --launcher.ini silent-install.ini -updateAll -log <ログ・ファイルのパスと名前>`
 - その他のプラットフォームの場合: `IBMIM --launcher.ini silent-install.ini --updateAll -log <ログ・ファイルのパスと名前>`

Installation Manager で認識されているすべての使用可能な製品の更新がインストールされます。

応答ファイルのコマンド

Installation Manager のサイレント・インストール機能を使用する場合は、**Installation Manager** で実行する必要のあるすべてのコマンドを含む応答ファイルを作成する必要があります。これを行う際に推奨されるのは、**IBM Rational Functional Tester** パッケージのインストール時のアクションを記録することによって、応答ファイルを作成する、という方法です。ただし、応答ファイルは手動で作成したり編集したりすることができます。

応答ファイルのコマンドには、以下の 2 つのカテゴリがあります。

- **設定コマンド**は、Installation Manager で「ファイル」 → 「設定」と選択したときに表示される設定 (リポジトリ・ロケーション情報など) を行う場合に使用します。
- **サイレント・インストール・コマンド**は、Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードをエミュレートするために使用します。

サイレント・インストール設定コマンド

通常は「設定」ウィンドウを使用して設定を指定しますが、サイレント・インストール中に使用する応答ファイルに設定 (キーとして識別されます) を指定することもできます。

注: 応答ファイルには、複数の設定を指定できます。

応答ファイルに設定を定義する場合、使用する XML コードは次の例のようになります。

```
<preference
  name = "the key of the preference"
  value = "the value of the preference to be set">
</preference>
```

次の表を使用して、サイレント・インストール設定用のキーとそれに関連した値を識別します。

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.logLocation	Installation Manager のログ・ファイルのロケーションを指定します。	重要: このキーはオプションであり、テストとデバッグ用に設計されています。ログ・ファイルのロケーションが未指定である場合、サイレント・インストールと UI バージョンの Installation Manager は、ともに同じロケーションを使用します。
com.ibm.cic.license.policy.location	リモート・ライセンス・ポリシー・ファイルを置く場所を定義する URL を指定します。	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyEnabled	True または False	「False」がデフォルト値です。

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.http.proxyUseSocks	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.SOCKS.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyEnabled	True または False	「False」がデフォルト値です。
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyHost	ホスト名または IP アドレス	
com.ibm.cic.common.core.preferences.ftp.proxyPort	ポート番号	
com.ibm.cic.common.core.preferences.eclipseCache	c:\IBM\common (Windows) /opt/IBM/common (Linux) 注: 上記のパスは、この設定のデフォルト値です。通常、インストール・パッケージによって、この設定に独自の値が提供されます。	パッケージを既にインストールしてある場合は、このロケーションを変更できません。
com.ibm.cic.agent.core.pref.offering.service.repositories.areUsed	True または False	使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。 「True」の場合は、製品のインストール時または更新時に、リンクされたすべてのリポジトリが検索されます。

キー	値	注
com.ibm.cic.common.core.preferences. preserveDownloadedArtifacts	True または False	<p>使用不可にするには、この設定を「False」に変更します。</p> <p>「True」の場合は、パッケージを前バージョンにロールバックするために必要なファイルが、システムに保管されます。</p> <p>「False」の場合、これらのファイルは保管されません。これらのファイルを保管しない場合、ロールバックするには、元のリポジトリまたはメディアに接続する必要があります。</p>

サイレント・インストール・コマンド

この表を参照すると、サイレント・インストール中に使用する応答ファイル・コマンドについてさらに詳細がわかります。

応答ファイルのコマンド	説明
<pre> プロファイル <profile id="プロファイル (パッケージ・グループ) ID" installLocation="プロファイルの インストール・ロケーション"> <data key="キー 1" value="値 1"/> <data key="キー 2" value="値 2"/> </profile> </pre>	<p>このコマンドは、パッケージ・グループ (またはインストール・ロケーション) を作成する場合に使用します。指定したパッケージ・グループがすでに存在する場合は、このコマンドの効果はありません。現時点では、プロファイルを作成すると、サイレント・インストールでは以下の 2 つのインストール・コンテキストも作成されます。1 つは Eclipse 用で、もう 1 つは native 用です。プロファイルは、インストール・ロケーションです。</p> <p>プロファイルのプロパティを設定するには、<data> 要素を使用します。</p> <p>現在サポートされているキーおよび関連する値は次のリストのとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • eclipseLocation キーは、c:¥myeclipse¥eclipse など、既存の Eclipse ロケーション値を指定します。 • cic.selector.nl キーは、zh、ja、en など、自然言語 (NL) のロケール選択を指定します。 <p>注: NL 値が複数ある場合はコンマで区切ります。</p> <p>現在サポートされている言語コードは次のリストのとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 英語 (en) • フランス語 (fr) • イタリア語 (it) • 中国語 (簡体字) (zh) • ロシア語 (ru) • 中国語 (繁体字) (台湾) (zh_TW) • 中国語 (繁体字) (香港) (zh_HK) • ドイツ語 (de) • 日本語 (ja) • ポーランド語 (pl) • スペイン語 (es) • チェコ語 (cs) • ハンガリー語 (hu) • 韓国語 (ko) • ポルトガル語 (pt_BR)

応答ファイルのコマンド	説明
<pre> リポジトリ <server> <repository location="http://example/ repository/"> <repository location="file:/C:/ repository/"> <!--add more repositories below--> <...> </server> </pre>	<p>このコマンドは、サイレント・インストール中に使用するリポジトリを指定する場合に使用します。リモート・リポジトリを指定する場合は URL または UNC パスを使用し、ローカル・リポジトリを指定する場合はディレクトリー・パスを使用します。</p>
<pre> インストール <install> <offering profile= "プロファイル ID" features= "フィーチャー ID" id= "製品 ID" version= "製品バージョン"></offering> <!--add more offerings below> <...> </install> </pre>	<p>このコマンドを使用して、インストールするインストール・パッケージを指定します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、またはプロファイル設定コマンドで作成されたプロファイルと一致している必要があります。</p> <p>フィーチャー ID は、コンマで区切られたリスト (「feature1, feature2」など) によって、オプションで指定できます。フィーチャー ID が指定されていない場合は、指定の製品のすべてのデフォルト・フィーチャーがインストールされます。</p> <p>バージョン番号は必要ありません。バージョンが指定されなかった場合は、Installation Manager によって、指定された ID を持つ最新の製品、および入手可能な更新とフィックスがインストールされます。</p> <p>注: 必須のフィーチャーは、コンマで区切られたリストで明示的に指定されていない場合であっても、インストール用に含まれます。</p>
<pre> <install modify="true"> または <uninstall modify="true"> (オプション属性) <uninstall modify="true"> <offering profile="プロファイル ID" id="ID" version="バージョン" features="-"/> </uninstall> </pre>	<p>既存のインストールを変更することを指示する場合は、install コマンドおよび uninstall コマンドの <install modify="true"> 属性を使用します。この属性が true に設定されていない場合、値はデフォルトで false に設定されます。変更操作を、追加の言語パックをインストールすることだけを目的に行う場合、製品フィーチャー ID リストでハイフン「-」を使用して、新しいフィーチャーを追加するわけではないことを指示する必要があります。</p> <p>重要: 例で指定しているように、「modify=true」とハイフン“-”から成るフィーチャー・リストを指定してください。そうしないと、install コマンドでは製品のデフォルト・フィーチャーがインストールされ、uninstall コマンドではすべてのフィーチャーが除去されます。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
<p>アンインストール</p> <pre><uninstall> <offering profile= "プロファイル ID" features= "フィーチャー ID" id= "製品 ID" version= "製品バージョン"></offering> <!--add more offerings below> <...> </uninstall></pre>	<p>このコマンドは、アンインストールするパッケージを指定する場合に使用します。</p> <p>プロファイル ID は、既存のプロファイル、またはプロファイル・コマンドで指定されたプロファイルに一致している必要があります。さらに、フィーチャー ID が指定されていない場合は、指定の製品のすべてのフィーチャーがアンインストールされます。製品 ID が指定されていない場合は、指定のプロファイル内のすべてのインストール済み製品がアンインストールされます。</p>
<p>ロールバック</p> <pre><rollback> <offering profile= "プロファイル ID" id= "製品 ID" version= "製品バージョン"> </offering> <!--add more offerings below <...> </rollback></pre>	<p>このコマンドは、指定したオフリングを、指定したプロファイルに現在インストールされているバージョンからロールバックする場合に使用します。 rollback コマンドでフィーチャーを指定することはできません。</p>
<p>すべてインストール</p> <pre><installALL/></pre> <p>注: このコマンドは、 -silent -installAll を使用した場合と同等です。</p>	<p>このコマンドは、すべての使用可能なパッケージをサイレントで検索し、インストールする場合に使用します。</p>
<p>すべて更新</p> <pre><updateALL/></pre> <p>注: このコマンドは、 -silent -updateAll を使用した場合と同等です。</p>	<p>このコマンドは、すべての使用可能なパッケージをサイレントで検索し、更新する場合に使用します。</p>
<p>ライセンス</p> <pre><license policyFile="ポリシー・ファイルのロケーション"/></pre> <p>例: <pre><license policyFile="c:%mylicense.opt"/></pre></p>	<p>このコマンドは、レコード・モードで Installation Manager を始動してからライセンス・ウィザードを開始することで、license コマンドを入れる応答ファイルを生成する場合に使用します。</p> <p>レコード・モード時に、ライセンス管理ウィザードでフレックス・オプションを設定すると、設定されたオプションは、生成された応答ファイルと同じディレクトリーにある「license.opt」という名前のライセンス・ポリシー・ファイルに記録されます。応答ファイルには、そのポリシー・ファイルを参照する license コマンドが入ります。</p>

応答ファイルのコマンド	説明
ウィザード <pre><launcher -mode wizard -input < response file ></pre>	このコマンドは、UI モードで Installation Manager を始動する場合に使用します。UI モードでは、インストール・ウィザードまたはアンインストール・ウィザードのいずれかで、Installation Manager を始動します。ただし、この場合、応答ファイルには preference コマンドと install コマンド、または preference コマンドと uninstall コマンドしか入れることができません。Installation Manager を UI モードで実行する場合は、同じ応答ファイルに install コマンドと uninstall コマンドを一緒に入れることはできません。

追加の応答ファイルの属性

応答ファイルの属性	説明
クリーン <pre><agent-input clean="true"> </agent-input></pre>	デフォルトでは clean="false" です。Installation Manager は、Installation Manager 中の既存の設定のセットに加えて、リポジトリや、応答ファイル中で指定されている他の設定も使用します。設定が応答ファイルと Installation Manager に指定されている場合は、応答ファイル中の設定が優先されます。 clean="true" に設定すると、Installation Manager はリポジトリや応答ファイル中で指定されている他の設定を使用します。Installation Manager 中の既存の設定のセットは使用されません。
一時 <pre><agent-input clean="true" temporary="false"> </agent-input></pre>	デフォルトでは、temporary は「false」に設定され、応答ファイル中の設定のセットは永続します。temporary="true" を設定すると、応答ファイル中の設定のセットは永続しません。 一時属性とクリーン属性を併用できます。例えば、clean を true に設定して temporary を false に設定すると、サイレント・インストールの実行後に、応答ファイル中に指定されたリポジトリの設定により、Installation Manager を使用した以前のセッション中の設定のセットが上書きされます。

応答ファイルの属性	説明
<p>ご使用条件の受諾</p> <pre><agent-input acceptLicense="false"> </agent-input></pre>	<p>デフォルトでは、サイレント・インストール・モードで Installation Manager を使用する際に、インストール・パッケージに含まれるすべてのライセンスの受諾に合意します。ご使用条件を受諾しない場合は、</p> <pre><agent-input></pre> <p>要素中で、サイレント・インストール操作を自動的に失敗させる追加属性の <code><agent-input acceptLicense="false"></code> を使用できます。インストールしようとしているインストール・パッケージに受諾しなければならないご使用条件がある場合は、サイレント・インストール操作が失敗します。</p>

参照: サンプル応答ファイル

XML ベースの応答ファイルを使用すると、サイレント・インストール設定、リポジトリのロケーション、インストール用プロファイルなどの事前定義情報を指定できます。応答ファイルは、インストール・パッケージをサイレントでインストールし、インストール・パッケージのロケーションと設定を標準化するチームや会社に役に立ちます。

サンプル応答ファイル
<pre><agent-input > <!-- add preferences --> <preference name="com.ibm.cic.common.core.preferences. http.proxyEnabled" value="c:/temp"/> <!-- create the profile if it doesn't exist yet --> <profile id="my_profile" installLocation="c:/temp/my_profile"></profile> <server> <repository location= "http://a.site.com/local/products/sample/20060615_1542/repository/"></repository> </server> <install> <offering profile= "my_profile" features= "core" id= "ies" version= "3.2.0.20060615"> </offering> </install> </agent-input></pre>

サイレント・インストール・ログ・ファイル

サイレント・インストール・ログ・ファイルを使用すると、サイレント・インストール・セッションの結果を検査できます。

サイレント・インストール機能によって、XML ベースのログ・ファイルが作成されます。このログ・ファイルには、サイレント・インストールを実行した結果が記録されます。これは、`-log <ログ・ファイル・パス>.xml` を使用して、ログ・ファイル・パスが指定されている場合です。サイレント・インストール・セッションが正常に行われた場合、ログ・ファイルには、`<result> </result>` のルート要素のみが

含まれます。しかし、インストール中にエラーが発生した場合は、以下のようなエラー要素が、メッセージとともにサイレント・インストール・ログ・ファイルに記録されます。

```
<result>
  <error> Cannot find profile: profile id</error>
  <error> some other errors</error>
</result>
```

詳細な分析については、**Installation Manager** データ域に生成されたログを参照してください。設定コマンドを使用することにより、選択したロケーションにデータ域をオプションで設定できます (応答ファイルのトピックを参照)。

ライセンスの管理

インストールした IBM ソフトウェアおよびカスタマイズしたパッケージのライセンス交付は、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して管理されます。「ライセンスの管理」ウィザードには、インストール済みの各パッケージのライセンス情報が表示されます。

一部の Rational 製品の 7.0 以降のバージョンに付属するトライアル・ライセンスは、インストール後 30 日または 60 日で有効期限が切れます。有効期限後に引き続き使用するには、製品をアクティブにする必要があります。

「ライセンスの管理」ウィザードを使用して、プロダクト・アクティベーション・キットをインポートすることで、本製品の試用バージョンを、ライセンス交付を受けたバージョンにアップグレードできます。トライアル・ライセンスまたはパーマネント・ライセンスを持つ本製品に対し、フローティング・ライセンスの適用を有効にして、ライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを使用することもできます。

ご使用の Rational 製品のライセンス管理について詳しくは、以下を参照してください。

- Rational 製品のアクティベーションに関する技術情報: <http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21250404>
- Rational のライセンス交付に関するサポート・ページ: <http://www.ibm.com/software/rational/support/licensing/>

ライセンス

IBM Rational ソフトウェア製品の購入者として、許可ユーザー・ライセンス、許可ユーザー期限付使用权 (FTL)、およびフローティング・ライセンスの 3 つのタイプの製品ライセンスの中から選択することができます。どのタイプのライセンスが組織に最適であるかは、製品を使用する人数、アクセス頻度、ソフトウェア購入の方針などによって異なります。

許可ユーザー・ライセンス

IBM Rational 許可ユーザー・ライセンスは、1 人の特定の個人に対して Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、製品にアクセスする個々のユーザーごとに、任意の方法で許可ユーザー・ライセンスを入手する必要があります。許可ユーザー・ライセンスの再割り当ては、割り当てた元のユーザーを購入者が長期間または永久に置き換える場合を除いて、許可されません。

例えば、許可ユーザー・ライセンスを 1 つ購入した場合、そのライセンスをある特定の個人に割り当てることができます。割り当てられた個人は、Rational ソフトウェア製品を使用することができます。許可ユーザー・ライセンスでは、いかなる場合も (ライセンス交付を受けた個人が製品を使用中でない場合でも) その製品を使用する権利を他者に与えることはありません。

許可ユーザー期限付使用权

IBM Rational 許可ユーザー期限付使用权 (FTL) は、1 人の特定の個人に対して特定期間 Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、アクセス方法の如何を問わず、製品にアクセスする個々のユーザーごとに、許可ユーザー FTL を入手する必要があります。許可ユーザー FTL の再割り当ては、購入者が長期間または恒久的に元のユーザーから引き継ぐ場合を除き、許可されません。

注: パスポート・アドバンテージ・エクスプレス・プログラムで許可ユーザー FTL を購入した場合、ライセンス満了前に購入者が IBM に延長を希望しないことを通知しない限り、IBM は現行価格でライセンス期間をさらに 1 年間自動的に延長します。継続 FTL 期間は、最初の FTL 期間の満了時に開始されます。この継続 FTL の価格は、現在、最初の FTL 価格の 80 パーセントですが、変更される可能性があります。

ライセンス期間を延長する意思がないことを IBM に通知した場合は、ライセンス満了時に製品の使用を中止しなければなりません。

フローティング・ライセンス

IBM Rational フローティング・ライセンスは、複数のチーム・メンバーで共用することができる、単一のソフトウェア製品に対するライセンスです。ただし、同時ユーザーの総数は、購入したフローティング・ライセンスの数を超えてはいけません。例えば、Rational ソフトウェア製品のフローティング・ライセンスを 1 つ購入した場合、組織内の任意のユーザーが任意の時期に製品を使用することができます。製品にアクセスしたい他のユーザーは、現行ユーザーがログオフするまで待たなければなりません。

フローティング・ライセンスを使用するには、フローティング・ライセンス・キーを入手して、Rational License Server にインストールする必要があります。サーバーは、ライセンス・キーへのアクセスを要求するエンド・ユーザー要求に応じます。サーバーは、その組織が購入したライセンス数と同じ数の同時ユーザーにアクセスを許可します。

ライセンスの使用可能化

Rational ソフトウェア製品を初めてインストールする場合、または製品の使用を継続するためにライセンスを延長したい場合に、製品のライセンスを使用可能にする方法を選択します。

Rational Software Delivery Platform 製品のライセンスを使用可能にするには、以下の 2 つの方法があります。

- プロダクト・アクティベーション・キットをインポートする方法
- Rational Common Licensing を使用可能にし、フローティング・ライセンス・キーにアクセスする方法

注: 一部の Rational 製品の 7.0 以降のバージョンに付属するトライアル・ライセンスは、インストール後 30 日または 60 日で有効期限が切れます。有効期限後に引き続き使用するには、製品をアクティブにする必要があります。アクティベーション・プロセスのフローチャートについては、プロダクト・アクティベ

ーションに関するサポート記事 <http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21250404> を参照してください。

アクティベーション・キット

プロダクト・アクティベーション・キットには、Rational のトライアル製品のパーマネント・ライセンス・キーが含まれています。アクティベーション・キットを購入し、その Zip ファイルをローカル・マシンにダウンロードしてから、その Jar ファイルをインポートし、製品のライセンスを使用可能にします。IBM Installation Manager を使用して、製品にアクティベーション・キットをインポートします。

フローティング・ライセンスの適用

オプションで、フローティング・ライセンス・キーを入手して、IBM Rational License Server をインストールすることで、ご使用の製品にフローティング・ライセンスを適用できます。フローティング・ライセンスを適用すると、次のような利点があります。

- 組織全体におけるライセンス準拠の徹底
- ライセンス購入数の削減
- 同じライセンス・サーバーからの、IBM Rational Team Unifying 用および Software Delivery Platform デスクトップ製品用のライセンス・キーの供給

注: 一部の Rational 製品の 7.0 以降のバージョンでは、Rational ライセンス・サーバーのアップグレード・バージョンが必要です。ライセンスのアップグレードの情報については、サポート記事 <http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21250404> を参照してください。

アクティベーション・キットおよびフローティング・ライセンスの入手方法について詳しくは、ライセンスの購入を参照してください。

インストール済みパッケージのライセンス情報の表示

IBM Installation Manager からインストール済みパッケージのライセンス情報を確認することができます。ライセンス情報には、ライセンス・タイプおよび有効期限が含まれています。

ライセンス情報を表示するには、以下のようにします。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. メインページで「ライセンスの管理」をクリックします。

インストールされているパッケージごとに、パッケージのベンダー、現行ライセンス・タイプ、および有効期限が表示されます。

プロダクト・アクティベーション・キットのインポート

パーマネント・ライセンス・キーをインストールするには、IBM Installation Manager を使用して、ダウンロード・ロケーションまたは製品メディアからアクティベーション・キットをインポートする必要があります。

アクティベーション・キットを購入していない場合、まず購入する必要があります。製品またはプロダクト・アクティベーション・キットを購入している場合は、該当する CD を挿入するか、アクセス可能なワークステーションに IBM パスポート・アドバンテージからアクティベーション・キットをダウンロードするかをいずれかを行います。アクティベーション・キットは、Java アーカイブ (.jar) ファイルを含む Zip ファイルとしてパッケージされています。この .jar ファイルにはパーマネント・ライセンス・キーが含まれています。製品をアクティブにするには、このキーをインポートする必要があります。

アクティベーション・キットの .jar ファイルをインポートして、新しいライセンス・キーを使用可能にするには、次のようにします。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. メインページで「**ライセンスの管理**」をクリックします。
3. パッケージを選択して「**アクティベーション・キットのインポート**」ボタンをクリックします。
4. 「**次へ**」をクリックします。 選択したパッケージの詳細 (現行のライセンスの種類、ライセンスの対象となる製品バージョンの範囲など) が表示されます。
5. アクティベーション・キットのメディア CD またはダウンロード・ロケーションのパスを参照して、適切な Java アーカイブ (JAR) ファイルを選択し、「**開く**」をクリックします。
6. 「**次へ**」をクリックします。「**要約**」ページに、アクティベーション・キットのインストール宛先ディレクトリー、新規ライセンスが適用される製品、およびバージョン情報が表示されます。
7. 「**終了**」をクリックします。

パーマネント・ライセンス・キーを含むプロダクト・アクティベーション・キットが製品にインポートされます。「**ライセンスの管理**」ウィザードに、インポートが正常に行われたかどうかが表示されます。

フローティング・ライセンスの使用可能化

チーム環境がフローティング・ライセンスの適用をサポートしている場合は、製品に対してフローティング・ライセンスを使用可能にし、フローティング・ライセンス・キーへのアクセスを取得するように接続を構成することができます。

フローティング・ライセンスの適用を可能にする前に、管理者からライセンス・サーバー接続情報を入手してください。ライセンス・サーバー、ライセンス・キー、および Rational Common Licensing の管理について詳しくは、「*IBM Rational* ライセンス管理ガイド」を参照してください。

「**ライセンス管理ガイド**」の最新版は、http://download.boulder.ibm.com/ibmdl/pub/software/rationalsdp/v7/rc1/701/docs/install_instruction/install.html からオンラインで入手可能です。

フローティング・ライセンスを指定のパッケージのライセンス・タイプとして使用可能にし、ライセンス・サーバー接続を構成するには、次のようにします。

1. Rational Software Development Platform の IBM Installation Manager で、「**ファイル**」 → 「**開く**」 → 「**ライセンスの管理**」の順をクリックします。

2. パッケージのバージョンを選択して、「フローティング・ライセンス・サポートの設定」ボタンを選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「フローティング・ライセンスの適用を可能にする」ボタンをクリックします。
5. 1 つ以上のライセンス・サーバー接続を構成します。
 - a. 「サーバー」テーブルの空フィールドをクリックするか、「追加」ボタンをクリックします。
 - b. 管理者から冗長サーバー環境の情報が提供されている場合、「冗長サーバー」ボタンをクリックします。1 次サーバー、2 次サーバー、および 3 次サーバーの、名前とポートのフィールドが表示されます。
 - c. 「名前」フィールドに、ライセンス・サーバーのホスト名を入力します。
 - d. (オプション) ファイアウォールを使用している環境では、「ポート」フィールドに値を入力します。管理者から指示がない限り、このポートには値を割り当てないでください。
 - e. 冗長サーバー環境の場合、2 次サーバーと 3 次サーバーの名前および (必要に応じて) ポートを入力します。
 - f. (オプション) 「接続のテスト」ボタンをクリックして、接続情報が正しいかどうか、サーバーが使用可能であるかどうかを確認できます。
 - g. 「OK」をクリックします。
6. 「次へ」をクリックします。
7. (オプション) シェル共有パッケージまたはカスタム・パッケージのライセンス使用順序を構成します。リスト内のライセンスの順序によって、ご使用のパッケージが特定のライセンス・パッケージのライセンス・キーへのアクセス取得を試みる順序が決定されます。
8. 「終了」をクリックします。

「ライセンスの管理」ウィザードに、フローティング・ライセンスの構成が正常に行われたかが示されます。

これによって、使用可能にした製品を次回開いた際に、ライセンス・サーバーに接続して、使用可能なフローティング・ライセンス・キーのプールからライセンス・キーを入手することができます。

ライセンスの購入

現行の製品ライセンスの有効期限が切れる場合、またはチーム・メンバー用に追加の製品ライセンスが必要な場合は、新規ライセンスをご購入いただけます。

ライセンスを購入して製品を使用可能にするには、以下のステップを完了してください。

1. 購入するライセンスのタイプを決定します。
2. ibm.com[®] にアクセスするか、IBM 営業担当員に連絡を取り、製品ライセンスを購入します。詳しくは、IBM Web ページのソフトウェアのご注文方法をご覧ください。
3. 購入したライセンス・タイプに応じて、受け取ったライセンス証書を使用し、以下のいずれかを実行して製品を使用可能にします。

- 製品の許可ユーザー・ライセンスを購入した場合は、パスポート・アドバンテージにアクセスし、記載されている説明に従って、プロダクト・アクティベーション・キットの Zip ファイルをダウンロードします。アクティベーション・キットをダウンロードしたら、Installation Managerを使用して、プロダクト・アクティベーションの .jar ファイルをインポートする必要があります。
- 製品のフローティング・ライセンスを購入した場合は、IBM Rational ライセンスおよびダウンロード (IBM Rational Licensing and Download) サイトへのリンクをクリックして、ログインし (IBM への登録が必要です)、次に IBM Rational ライセンス・キー・センター (IBM Rational License Key Center) に接続するためのリンクを選択します。そこで、ライセンス証書を使用して、ご使用のライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを取得できます。

オプションで、パスポート・アドバンテージにアクセスして、製品のアクティベーション・キットをダウンロードすることもできます。アクティベーション・キットをインポートした後に、長期間コンピューターをオフラインで使用する場合は、フローティング・ライセンス・タイプからパーマネント・ライセンス・タイプに切り替えることができます。

この後、アクティベーション・キットをインポートするか、製品のフローティング・ライセンス・サポートを使用可能にする場合は、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用します。

Linux ワークステーション上のファイル・ハンドル数を増やす

重要: 最適な結果を得るためには、Rational 製品を使用して作業する前に、Rational Functional Tester で使用できるファイル・ハンドルの数を増やしてください。プロセス当たりのデフォルト限度数である 1024 個よりも多く使用するためです。(この変更はシステム管理者が行う必要があります。)

以下のこれらのステップに従って Linux でファイル記述子を増やす場合は注意してください。指示に正確に従わないと、コンピューターが正しく始動しなくなる可能性があります。最適な結果を得るために、システム管理者にこの手順を実行してもらってください。

ファイル記述子を増加するには、以下のようにします。

1. root としてログインします。root アクセスがない場合は、継続する前に獲得する必要があります。
2. etc ディレクトリーに移動する。
3. vi エディターを使用して etc ディレクトリー内の initscript ファイルを編集する。このファイルがない場合は、vi initscript と入力して作成してください。

重要: ファイル・ハンドルの数を増やす場合は、コンピューター上に空の initscript ファイルを残さないでください。残した場合、次回電源をオンにしたり再始動した場合に、マシンが始動しなくなります。

4. 1 行目に「ulimit -n 4096」と入力する (ここで重要なのは、この数値がほとんどの Linux コンピューターでのデフォルト値である 1024 よりもかなり大きな数値である点です)。注意: この数をあまり高く設定しないでください。システム全体のパフォーマンスに重大な影響を及ぼす可能性があります。
5. 2 行目に eval exec "\$4" と入力する。
6. ステップ 4 と 5 を確実に完了した後に、ファイルを保管して閉じる。

注: 必ずステップを正しく実行してください。正しく実行しないと、マシンがブートしなくなります。

7. オプション: etc/security ディレクトリーにある limits.conf ファイルを変更してユーザーまたはグループを制限します。SUSE Linux Enterprise Server (SLES) バージョン 9 と Red Hat Enterprise Linux バージョン 4.0 の両方で、このファイルがデフォルトで用意されています。このファイルがない場合は、ステップ 4 でもっと少ない数 (例えば 2048) を指定してください。この指定は、プロセスごとに許容されるオープン・ファイル数の制限が、ほとんどのユーザーに対して可能な範囲で低くなるようにするために必要です。ステップ 4 で比較的低い数字を使用した場合は、これを行うことはそれほど重要ではありません。ただし、ステップ 4 で高い数字を選択した場合は、limits.conf ファイルに限度を設定しないとコンピューターのパフォーマンスに重大な影響があります。

以下は、すべてのユーザーを制限して、後で異なる限度を設定した場合に、サンプルの `limits.conf` ファイルがどのように見えるかを示したものです。このサンプルでは、前述のステップ 4 で記述子を 8192 に設定したことを想定していません。

```
*      soft nofile 1024
*      hard nofile 2048
root   soft nofile 4096
root   hard nofile 8192
user1  soft nofile 2048
user1  hard nofile 2048
```

上記サンプルの * は、最初にすべてのユーザーの限度を設定するために使用されます。これらの限度は、その後の限度よりも低くなっています。root ユーザーにオープンされている許容記述子の数はこれより高くなり、user1 はその 2 つの間になります。変更を行う前に、`limits.conf` ファイルに含まれている文書を必ず読んで理解しておいてください。

`ulimit` コマンドについて詳しくは、`ulimit` のマニュアル・ページを参照してください。

Rational Functional Tester の開始

Rational Functional Tester は、デスクトップ環境またはコマンド行インターフェースから開始できます。

- Windows の場合: この製品をデスクトップから開始するには、「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM Software Delivery Platform」 → 「IBM Rational Functional Tester」 → 「Java 用スクリプト作成」をクリックするか、「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM Software Delivery Platform」 → IBM Rational Functional Tester → 「.Net 2003 用スクリプト作成/.Net 2005 用スクリプト作成」をクリックします。
- Windows の場合: コマンド行から Rational Functional Tester Java スクリプトを開始するには、次のように入力します。

```
<product installation directory>%eclipse.exe -product  
com.ibm.rational.rft.product.ide
```

- Windows の場合: コマンド行から Rational Functional Tester .Net 2003 スクリプトまたは .Net 2005 スクリプトを開始するには、次のように入力します。

```
"<product installation directory>%Common7%IDE%devenv.exe"
```

- Linux の場合: コマンド行から Rational Functional Tester を開始するには、次のように入力します。

```
<product installation directory>%ft_starter
```

Functional Tester Extension for Terminal-based Applications の開始

1. Functional Tester アプリケーション・ウィンドウで、「構成」 → 「テストのためにアプリケーションを構成」をクリックします。
2. 「アプリケーション構成ツール」ウィンドウで、リストから「**Extension for Terminal Applications**」を選択し、「実行」をクリックします。

注: Functional Tester Recording モニターで、「アプリケーションの開始」ウィンドウに Extension for Terminal-based Applications がリストされます。また、機能テスト・スクリプトの記録中に Functional Tester Extension for Terminal-based Applications アプリケーションを開始することもできます。

Rational Functional Tester の更新

IBM Installation Manager でインストールされたパッケージの更新をインストールできます。パッケージの更新にはインストール済みのフィーチャーに対するフィックスや更新が提供されており、さらに「パッケージの変更」ウィザードを使用してインストールできる新しいフィーチャーが含まれていることもあります。

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネットへのアクセスが必要になります。

各インストール済みパッケージには、それぞれのデフォルトの IBM 更新リポジトリのロケーションが組み込まれています。Installation Manager が IBM 更新リポジトリ・ロケーションでインストール済みパッケージを検索するには、「リポジトリ」の設定ページで「インストールと更新を行っている間にサービス・リポジトリをサーチします」の設定を選択する必要があります。この設定はデフォルトで選択されています。

詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

注: Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてから、更新を開始してください。

注: Rational Functional Tester または Functional Tester Extension for Terminal-based Applications を更新する前に、Eclipse と Visual Studio IDE、および開いているすべての Web ブラウザー、Functional Tester で有効になっているその他のすべてのアプリケーションを閉じます。

製品パッケージの更新を検索してインストールするには、次のようにします。

1. Installation Manager の「スタート」ページで、「パッケージの更新」をクリックします。
2. IBM Installation Manager がシステム上で検出されない場合、または以前のバージョンが既にインストールされている場合は、最新のリリースをインストールして続行する必要があります。ウィザードの指示に従って、IBM Installation Manager のインストールを完了します。
3. 「パッケージの更新」ウィザードで、更新する Rational Functional Tester 製品パッケージがインストールされているパッケージ・グループのロケーションを選択するか、「すべて更新」チェック・ボックスを選択して、「次へ」をクリックします。Installation Manager は、そのリポジトリ内、および Rational Functional Tester の事前に定義した更新サイトで更新を検索します。進行状況表示に検索状況が表示されます。
4. パッケージの更新が検出されると、「パッケージの更新」ページの各パッケージの下の「更新」リストにそれらが表示されます。デフォルトでは、推奨される更新のみが表示されます。「すべてを表示」をクリックすると、使用可能なパッケージに対して検出されたすべての更新が表示されます。
 - a. 更新の詳細を知りたい場合は、「更新」をクリックし、「詳細」の下の説明を参照してください。

- b. 更新に関する追加情報が入手可能な場合は、説明本文の最後に「**詳細情報**」リンクが表示されます。このリンクをクリックすると、ブラウザーに情報が表示されます。更新をインストールする前に、この情報を確認しておくようにしてください。
 5. インストールする更新を選択するか、「**推奨を選択**」をクリックしてデフォルトの選択を復元します。依存関係のある更新は、自動でまとめて選択およびクリアされます。
 6. 「**次へ**」をクリックして続けます。
 7. 「**ライセンス**」ページで、選択した更新のご使用条件を読みます。「**ライセンス**」ページの左側に、選択した更新のライセンスのリストが表示されます。各項目をクリックすると、ご使用条件の本文が表示されます。
 - a. ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックします。
 - b. 「**次へ**」をクリックして続けます。
 8. 更新をインストールする前に「**要約**」ページで選択内容を確認します。
 - a. 前のページで行った選択を変更したい場合は、「**戻る**」をクリックして変更を行います。
 - b. そのままで問題なければ、「**更新**」をクリックし、更新をダウンロードしてインストールします。進行状況表示にインストールの完了パーセントが表示されます。
- 注:** 更新プロセス中に、**Installation Manager** がパッケージの基本バージョンのリポジトリ・ロケーションの入力を求めるプロンプトを表示することがあります。製品を **CD** またはその他のメディアからインストールした場合は、更新機能を使用するときそれらのメディアを使用できるようにしておく必要があります。
9. オプション: 更新プロセスが完了すると、プロセスの成功を確認したというメッセージが、ページの上部に表示されます。「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、新規ウィンドウで現行セッションのログ・ファイルを開きます。続行するには、「**インストール・ログ**」ウィンドウを閉じる必要があります。
 10. 「**完了**」をクリックしてウィザードを閉じます。
 11. オプション: 「**更新**」ウィザードを使用して更新されるのは、すでにインストールされているフィーチャーに限られます。インストールしたい新規のフィーチャーが更新に含まれている場合は、「**パッケージの変更**」ウィザードを実行して、フィーチャー選択パネルからインストールする新規フィーチャーを選択してください。

インストールの変更

IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードで、インストール済み製品パッケージの言語およびフィーチャーの選択を変更できます。「パッケージの変更」ウィザードを使用して、更新パックなどの、パッケージ更新に含まれている可能性のある新しいフィーチャーをインストールすることもできます。

デフォルトでは、リポジトリ設定がローカル更新サイトを指していない限り、インターネットへのアクセスが必要になります。詳しくは、Installation Manager のヘルプを参照してください。

注: Installation Manager を使用してインストールしたプログラムをすべて閉じてから、変更を開始してください。

インストール済み製品パッケージを変更するには、以下のようになります。

1. Installation Manager の「スタート」ページから、「パッケージの変更」アイコンをクリックします。
2. 「パッケージの変更」ウィザードで、Rational Functional Tester 製品パッケージのインストール・ロケーションを選択し、「次へ」をクリックします。
3. 「言語」の「変更」ページでパッケージ・グループの言語を選択して、「次へ」をクリックします。パッケージのユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションについて、対応する各国語翻訳がインストールされます。この選択は、このパッケージ・グループにインストールされたすべてのパッケージに適用されることに注意してください。
4. 「フィーチャー」ページで、インストールまたは除去するパッケージ・フィーチャーを選択します。
 - a. フィーチャーの内容を知りたい場合は、そのフィーチャーをクリックして、「詳細」で簡単な説明を確認します。
 - b. フィーチャー間の依存関係を表示するには、「依存関係の表示」を選択します。フィーチャーをクリックすると、それに依存するフィーチャーとその従属フィーチャーが、「依存関係」ウィンドウに表示されます。パッケージ内のフィーチャーを選択したり除外したりすると、Installation Manager は、他のフィーチャーとの依存関係を自動的に強制し、ダウンロード・サイズおよびインストールに必要なディスク・スペース所要量を更新して表示します。
5. フィーチャーの選択が終了したら、「次へ」をクリックします。
6. インストール・パッケージを変更する前に「要約」ページで選択内容を確認し、次に「変更」をクリックします。
7. オプション: 変更プロセスが完了したら、「ログ・ファイルの表示」をクリックして完了ログを確認します。

前のバージョンへの更新の復帰

IBM Installation Manager の「パッケージのロールバック」ウィザードを使用することで、一部のパッケージに対する更新を除去して前のバージョンに戻すことができます。

ロールバック・プロセスの際、Installation Manager は前のバージョンのパッケージのファイルにアクセスする必要があります。デフォルトでは、これらのファイルは新しいパッケージにアップグレードしたときにコンピューターに保管されます。アップグレード中に、ロールバック用にローカルに保管されているファイルを削除している場合か、「設定」ページの「**ロールバック用ファイルを保管**」チェック・ボックス（「ファイル」>「設定」>「**ロールバック用ファイル**」）のチェック・マークを外している場合は、前のバージョンのパッケージのインストールに使用したメディアかリポジトリがないと、そのバージョンにロールバックできません。

更新を製品パッケージに適用した後で、その更新を除去して前のバージョンの製品に戻す場合は、ロールバック・フィーチャーを使用します。ロールバック・フィーチャーを使用する場合、Installation Manager は更新されたリソースをアンインストールして、前のバージョンのリソースを再インストールします。1 度に 1 つのバージョン・レベルにしかロールバックできません。

詳細については、Installation Manager のオンライン・ヘルプまたはインフォメーション・センターを参照してください。

更新を前のバージョンに戻す場合は、次の手順に従ってください。

1. 「スタート」ページで「**パッケージのロールバック**」をクリックします。
2. 「ロールバック」ウィザードで、「**インストール・パッケージ**」リストから、前のバージョンに戻すパッケージを選択します。
3. ウィザードの指示に従います。

注: ロールバック・フィーチャーは、Functional Tester バージョン 7.0.1.2 以降に限り使用可能です。

Rational Functional Tester のアンインストール

Installation Manager の「アンインストール」パッケージ・オプションを使用すると、1 つのインストール・ロケーションから複数のパッケージをアンインストールできます。すべてのインストール・ロケーションからインストール済みのすべてのパッケージをアンインストールすることもできます。

パッケージをアンインストールするには、製品パッケージをインストールするために使用したのと同じユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。

注: Rational Functional Tester または Functional Tester Extension for Terminal-based Applications をアンインストールする前に、Eclipse と Visual Studio IDE、および開いているすべての Web ブラウザー、Functional Tester で有効になっているその他のすべてのアプリケーションを閉じます。

パッケージをアンインストールするには、以下のようにします。

1. Installation Manager を使用してインストールしたプログラムを閉じます。
2. 「スタート」ページで「**パッケージのアンインストール**」をクリックします。
3. 「パッケージのアンインストール」ページで、アンインストールする Rational Functional Tester 製品パッケージを選択します。「**次へ**」をクリックします。

注: Functional Tester Extension for Terminal-based Applications をアンインストールするには、パッケージをリストから選択します。

4. 「要約」ページでアンインストールするパッケージのリストを確認してから「**アンインストール**」をクリックします。アンインストールが終了すると、「完了」ページが表示されます。
5. 「**終了**」をクリックしてウィザードを終了します。

IBM Packaging Utility

IBM Packaging Utility ソフトウェアを使用すると、製品パッケージをリポジトリにコピーできます。リポジトリは、HTTP または HTTPS を介して使用可能な Web サーバーに置くことができます。

Packaging Utility ソフトウェアは、Rational Functional Tester に同梱されている、各プラットフォーム (Windows および Linux) 用の Enterprise Deployment CD にあります。Rational Functional Tester パッケージを含むリポジトリを HTTP または HTTPS 上で使用可能な Web サーバーに置く場合は、Packaging Utility を使用して、Rational Functional Tester 製品パッケージをリポジトリにコピーする必要があります。

このユーティリティーを使用して、以下のタスクを実行します。

- 製品パッケージ用新規リポジトリの生成。
- 新規リポジトリへの製品パッケージのコピー。複数の製品パッケージを 1 つのリポジトリにコピーできます。したがって、組織内に共通のロケーションを作成し、そこから IBM Installation Manager を使用して製品をインストールできます。
- リポジトリからの製品パッケージの削除。

Packaging Utility の使用方法について詳しくは、このツールのオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility のインストール

IBM Packaging Utility を使用して Rational Functional Tester 製品パッケージをコピーするには、事前に Enterprise Deployment CD からこのユーティリティーをインストールしておく必要があります。

次のステップに従って、IBM Packaging Utility ソフトウェアを Enterprise Deployment CD からインストールしてください。

1. 該当プラットフォームに関する Enterprise Deployment CD に移動して、CD から Zip ファイルを取り出します。
2. Packaging Utility ディレクトリに移動し、圧縮ファイル (pu.disk_win32.zip または pu.disk_linux.zip) から Packaging Utility インストール・パッケージを解凍します。
3. Packaging Utility インストーラーの実行可能ファイルを見つけます。
 - Windows の場合: pu.disk_win32.zip ファイルの解凍が実行された場所にある InstallerImage_win32 ディレクトリに移動します。インストーラーの実行可能ファイル「install.exe」を見つけます。
 - Linux の場合: pu.disk_linux.zip ファイルの解凍が実行された場所にある InstallerImage_linux ディレクトリに移動します。インストーラーの実行可能ファイル「install」を見つけます。

4. インストーラーの実行可能ファイルを開始し、ウィザードの指示に従って Packaging Utility をインストールします。
5. IBM Installation Manager がワークステーション上に検出されない場合は、それをインストールするようプロンプトが表示され、インストール・ウィザードが開始します。ウィザードの指示に従って、Installation Manager のインストールを完了します。詳しくは、27 ページの『Windows への Installation Manager のインストール』を参照してください。
6. Installation Manager のインストールが完了したら、あるいは、すでにコンピューター上にある場合は、Installation Manager が開始し、自動的に「パッケージのインストール」ウィザードが開始します。
7. 「パッケージのインストール」ウィザードの説明に従って、インストールを完了します。

Packaging Utility を使用した HTTP サーバーへの製品パッケージのコピー

HTTP または HTTPS サーバー上にリポジトリを作成する場合は、Packaging Utility を使用して、Rational Functional Tester の製品パッケージをコピーする必要があります。

この方法では、Rational Functional Tester インストール・イメージと一緒に組み込まれているオプション・ソフトウェアはコピーされないことに注意してください。IBM Installation Manager を使用してインストールされる Rational Functional Tester ファイルしかコピーされません。

また、Packaging Utility を使用すると、複数の製品パッケージを 1 つのリポジトリ・ロケーションにまとめることができます。詳しくは、Packaging Utility のオンライン・ヘルプを参照してください。

Packaging Utility を使用して製品パッケージをコピーするには、以下のようになります。

1. CD イメージからコピーする場合は、以下のタスクを実行します。
 - a. 1 枚目のインストール CD を CD ドライブに挿入します。
 - b. Linux の場合: CD ドライブをマウントします。
 - c. システムで自動実行が使用可能になっている場合は、Rational Functional Tester ランチパッド・プログラムが自動的に開きます。ランチパッド・プログラムを閉じます。
2. Packaging Utility を開始します。
3. ユーティリティのメインページで、「パッケージのコピー」をクリックします。「前提条件」ページが開き、以下の 2 つのオプションが表示されます。
 - **IBM Web から製品パッケージをダウンロードします**
 - **他のソースから製品パッケージを取得します**
4. 「**IBM Web から製品パッケージをダウンロードします**」をクリックします。

注: すでにアクセス可能なリポジトリを定義している場合は、「**他のソースから製品パッケージを取得します**」オプションを使用できます。

5. 「次へ」をクリックして、「ソース」ページに進みます。選択する製品パッケージがない場合は、製品パッケージが含まれているリポジトリを開く必要があります。
6. リポジトリを開くには、「リポジトリを開く」ボタンをクリックします。「リポジトリを開く」ウィンドウが開きます。

注: リポジトリは、ローカル・ファイル・システム上のファイルへのパス、1枚目の製品 CD が含まれているディスク・ドライブ、またはサーバー上のファイルの URL です。

7. リポジトリ・ロケーションを定義するには、リポジトリ・ロケーションの「参照」ボタンをクリックし、ディスク・イメージが含まれているリポジトリ・ロケーション (共通ルート・ディレクトリー) にナビゲートします。例えば、製品ファイル (disk1、disk2 など) が C:\productA\unzip にある場合は、この場所にナビゲートし、repository.config ファイル、diskTag.inf、Jar ファイル、または Zip ファイルを選択する必要があります。
8. 「OK」をクリックしてリポジトリ・ロケーションを定義し、「リポジトリ・ディレクトリーの参照」ウィンドウを閉じます。
9. 「宛先」ページで、「参照」ボタンをクリックし、製品の保管先として、既存のリポジトリ・ディレクトリーを選択するか、または新規フォルダーを作成します。
10. 選択した製品パッケージおよびフィックス用のリポジトリを指定したら、「OK」をクリックして「ディレクトリーを参照」ウィンドウを閉じます。定義したファイル・パスが、「宛先」ページの「ディレクトリー」フィールドにリストされます。
11. 「次へ」をクリックして、「要約」ページに進みます。「要約」ページに、宛先リポジトリにコピーされる選択済み製品パッケージが表示されます。また、このページには、コピーに必要なストレージ・スペースの量およびドライブ上で使用可能なスペースの量もリストされます。
12. 「コピー」をクリックして、選択済み製品パッケージを宛先リポジトリにコピーします。ウィザードの下部に、コピー・プロセスにあとどのくらいの時間がかかるかを示すステータス・バーが表示されます。コピー・プロセスが終了すると、「完了」ページが開き、正常にコピーされた製品パッケージがすべて表示されます。
13. 「終了」をクリックして、Packaging Utility のメインページに戻ります。

Packaging Utility を使用して Rational Functional Tester インストール・ファイルをリポジトリにコピーしました。これで、Web サーバー上にリポジトリを置いて、ディレクトリーおよびファイルを HTTP で使用できるようになります。(リポジトリは、UNC ドライブにも置くことができます。)

IBM Packaging Utility の処理に関する最新情報は、<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1m0r0/index.jsp> の、IBM Packaging Utility のインフォメーション・センターを参照してください。

オプション・ソフトウェアのインストール

以下のオプション・ソフトウェアが Rational Functional Tester インストール・イメージに組み込まれています。

- IBM Rational Manual Tester バージョン 7.0
- IBM Rational ClearCase® LT バージョン 7.0.1

Manual Tester の Functional Tester によるインストール

IBM Rational Functional Tester を購入された場合は、IBM Rational Manual Tester の使用権も取得します。Manual Tester は Functional Tester ランチパッドからインストールできます。

Manual Tester は、Windows オペレーティング・システムのみで実行する内蔵タイプのアプリケーションです。デフォルトでは、Functional Tester と同じ共有リソースを使用しますが、独自のパッケージ・グループを作成します。このデフォルト設定を使用する必要があります。詳しくは、製品 CD の documents ディレクトリーにある Manual Tester の「インストール・ガイド」を参照してください。

Manual Tester をインストールするには、以下のステップを実行します。

1. 製品 CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. ランチパッドから、「**IBM Rational Manual Tester のインストール**」をクリックします。
3. Installation Manager の「**パッケージのインストール**」をクリックします。
4. Installation Manager のステップを実行して、インストールを完了します。指示に従って、デフォルトの設定を受け入れます。

注: Manual Tester のキーワード機能を使用可能にするには、追加の Manual Tester ライセンスを購入する必要があります。

ClearCase LT のインストール

Rational ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・チーム向けの構成管理ツールです。ClearCase LT は、小規模なプロジェクト・ワークグループから、分散されたグローバル企業まで対応する、IBM Rational ClearCase 製品ファミリーの一部です。

インストール・メディアには、Rational ClearCase LT バージョン 7.0.1 が入っています。これは、Rational Functional Tester とは別にインストールされます。

ClearCase LT が既にワークステーションにインストールされている場合は、それを現行バージョンにアップグレードできます。旧バージョンからのアップグレードについては、ClearCase LT のインストール文書を参照してください。

Rational Functional Tester と ClearCase LT を連携させて作業できるようにするには、Rational ClearCase SCM アダプター・フィーチャーをインストールする必要があります。デフォルトでは、このフィーチャーは Rational Functional Tester をイン

ストールする際に選択されていますが、これを組み込まなかったとしても、IBM Installation Manager の「パッケージの変更」ウィザードを使用して、後でインストールできます。詳しくは、71 ページの『インストールの変更』を参照してください。

Rational ClearCase SCM アダプターは、有効にしてからでなければ使用できません。アダプターを有効にして使用方法については、オンライン・ヘルプを参照してください。

ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報の探索

Rational ClearCase LT をインストールする場合の詳細な説明については、ClearCase LT インストール・メディアに添付されているインストール文書を参照してください。また、製品のインストール前に、ClearCase LT リリース情報を一読されることを強くお勧めします。

一部の文書は、Acrobat PDF ファイルになっています。ファイルを開くには、Adobe Reader ソフトウェアが必要です。これは、<http://www.adobe.com/products/acrobat/readstep2.html> からダウンロードできます。

Windows の場合: インストールの説明およびリリース情報は、ClearCase LT インストール・ランチパッドから表示できます。83 ページの『Rational ClearCase LT のインストールの開始』を参照してください。

インストールの説明を開くには、次のようにします。

- Windows の場合: 1 枚目の ClearCase LT インストール CD (または電子イメージのディスク・ディレクトリー) から、`doc\books\install.pdf` を開きます。
- Linux の場合: ダウンロード手順については、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=pub1gi11636600> を参照してください。

IBM Publications Center からの文書の取得

Rational ClearCase LT のインストール説明およびリリース情報は、IBM Publications Center からダウンロードすることもできます。

1. <http://www.ibm.com/shop/publications/order> にアクセスします。
2. Publications Center の「Welcome」ページで、国/地域を選択する。
3. 「マニュアル検索」をクリックします。
4. 該当する検索フィールドに、文書タイトルまたは資料番号を入力します。
 - 文書をタイトルで検索するには、「キーワード」フィールドにタイトルを入力します。
 - 文書を資料番号 (資料 ID) で検索するには、「資料番号」フィールドに番号を入力します。

表 1. ClearCase の資料番号

文書	資料番号
IBM Rational ClearCase、ClearCase MultiSite®、ClearCase LT Windows インストールおよびアップグレードガイド	GI88-8709-00

表 1. ClearCase の資料番号 (続き)

文書	資料番号
IBM Rational ClearCase、ClearCase MultiSite、ClearCase LT インストールおよびアップグレードガイド (UNIX®)	GI88-8710-00
IBM Rational ClearCase LT リリース・ノート	GI88-8713-01

Rational ClearCase LT のインストールの開始

このセクションでは、Rational ClearCase LT のインストール・プロセスの開始について説明します。製品をインストールする場合は、「Rational ClearCase LT Installation Guide」に記載の詳細なインストール説明を参照してください。インストールの前に、リリース情報を一読されることを強くお勧めします。

Windows への Rational ClearCase LT のインストールの開始

- 次のいずれかの方法を使用して、Rational ClearCase LT ランチパッド・プログラムを開始します。
 - Rational Functional Tester ランチパッド・プログラム (33 ページの『ランチパッド・プログラムの開始』を参照) から、「**Rational ClearCase LT**」をクリックします。
 - Rational ClearCase LT の 1 枚目の CD を挿入します。ランチパッド・プログラムが自動的に始動します。プログラムが実行されない場合は、その CD またはディスク・イメージのルートから、`setup.exe` を実行してください。
- リリース情報をまだ読んでいない場合は、一読します。
- 「**IBM Rational ClearCase LT のインストール**」をクリックします。Rational ClearCase LT セットアップ・ウィザードが開きます。

セットアップ・ウィザードの指示に従って、インストールを完了します。

Linux への Rational ClearCase LT のインストール

Rational ClearCase LT バージョン 7.0 を Linux ワークステーションにインストールする場合の詳細な説明は、「*IBM Rational ClearCase, ClearCase MultiSite, and ClearCase LT Installation Guide, 7.0, Linux and UNIX*」にあります。この文書は、<http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?uid=pub1gi11636600> からダウンロードできます。

Rational ClearCase LT ライセンスの構成

Rational Functional Tester が Rational ClearCase LT と同じコンピューターにインストールされている場合は、Rational ClearCase LT のライセンスの構成を行う必要はありません。しかし、Rational ClearCase LT を Rational Functional Tester なしでインストールする場合は、ClearCase LT のライセンスの構成を行う必要があります。

ライセンスの構成について詳しくは、ClearCase LT のインストール・ガイド を参照してください。

特記事項

© Copyright IBM Corporation 2000, 2008.

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711
東京都港区六本木 3-2-12
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

*Intellectual Property Dept. for Rational Software
IBM Corporation
20 Maguire Road
Lexington, Massachusetts 02421-3112
U.S.A.*

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

商標

以下は、International Business Machines Corporation の米国およびその他の国における商標です。

- ClearQuest
- IBM
- Passport Advantage[®]
- Rational
- WebSphere[®]
- iSeries
- zSeries

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。



Printed in Japan

GI88-4103-03



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12